

## 備前市の歴史人物（50音順）

あかし  
てるお  
明石 照男



明石照男

明石照男（明治14（1881）年～昭和31（1956）年）は、和気郡岩崎村（現備前市吉永町岩崎）出身の銀行家・財界人です。閑谷学校の教授を務めた武元君立の曾孫として生まれ、岡山中学校（現在の岡山県立岡山朝日高等学校）を卒業し、明治39（1906）年に東京帝国大学法科政治科を卒業します。明治44（1911）年に第一国立銀行（現在のみずほ銀行）に入社すると、第一国立銀行の京都支店や伏見支店の支配人、第一国立銀行常務取締役兼支配人を歴任し、昭和10（1935）年には第一銀行の頭取となりました。また、第一国立銀行の創始者であり大実業家である洪沢栄一の長女を妻に迎えました。

第二次世界大戦後は経済団体連合会や日本経営者団体連盟（両者は後に日本経済団体連合会に統合）の顧問等を務めました。

明石照男の郷土に対する最大の功績は、閑谷学校への膨大な量の書籍寄贈にあります。昭和8（1933）年、閑谷中学校へ『頼山陽先生真蹟百選』『洪沢青渕揮毫論語』等を寄贈し、その後も次々と

教育資料・郷土資料を閑谷学校に贈呈しています。また、昭和10（1935）年には閑谷中学校に多額の寄付金を寄せ、学校は「明石文庫」として寄贈書籍を整理しました。

明石文庫に納められた近代以降の書籍は、四書五經に関するものや、『蕃山全集』（熊沢蕃山著 正宗敦夫編 昭和15（1940）年）・『日本外史解義』（頼成一著 昭和6（1931）年）のような日本・東洋・西洋の思想書や歴史書、『池田勝入齋信輝公小傳』（池田家岡山事務所発行 昭和9（1934）年）のような伝記、『日本名勝地誌』（博文館発行 明治30（1897）年）をはじめとする地理書、『金融倫理』（明石照男述 昭和28（1953）年）等自身の著書を含めた経済書のほか、教育書、自然科学書、文学全集等多岐に渡り、日本語の刊行物のみならず、洋書も多数含まれています。

また、明石家（旧武元家）が和気郡北方村（現備前市吉永町北方）の大庄屋格の家であったこともあり、明石家に伝わっていた北方村の検地帳や畝高・人馬数の記録をはじめとする村方文書や、父祖にあたる武元君立の著書『勸農策』、君立の兄・登々庵に關係する資料等多数が明石文庫に収蔵されています。明石照男が後半生にわたって閑谷学校に寄贈したこれらの資料は1000点近くに上り、かつての学校教育を支えただけでなく、現在も地域の歴史文化を紐解く貴重な文化財として大切に保管されています。

### 〔参考文献〕

- ・ 旧閑谷学校歴史資料目録
- ・ 岡山県行幸記念誌
- ・ 閑谷学校ゆかりの人々
- ・ 吉永町史資料編

いけだ みつまさ  
池田 光政  
備前の名君

幼少期～岡山藩移封

池田光政（慶長14（1609）年～天和2（1682）年）は、初代岡山藩主です。



閑谷神社の池田光政坐像（県指定重要文化財）

通称新太郎、輝政の子で備前監国（註1）である池田利隆（のちの姫路藩主）の長男として岡山に生まれました。元和2（1616）年、光政が8歳の時に父が死去し、播磨国（現兵庫県）姫路藩42万石を相続しましたが、若年のため翌年因幡・伯耆32万石鳥取藩主となりました。寛永3（1626）年左近衛少将（註2）に任ぜられ、寛永5（1628）年本田忠刻の正室、天樹院（千姫）の娘勝子（円盛院）と結婚しました。家臣の補佐を得て鳥取城を築き、城下町をつくりました。寛永9（1632）年、父の早

世で、3歳で家督を継ぐことになった従弟の池田光仲と差し替えて国替えを命じられ、31万5千石の岡山藩主となりました。寛永19(1642)年、幕府の寛永政治に倣って寛永の改革を行い、仕置家老3人を任命し、藩主親政を実施、諸役人を差し替えて諸法度を整備しました。このきっかけは、当時の江戸幕府3代將軍家光が、寛永14(1637)年の島原の乱を反省材料として、民をいたわる撫民の方針を指示したことによります。

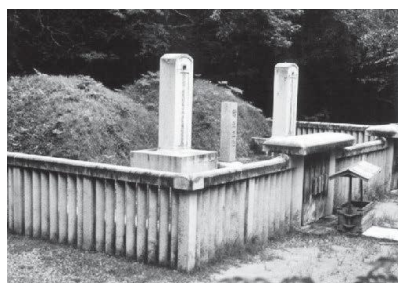
家光からの信任の厚かった光政は、家光の期待に応えるべく自ら藩政の先頭に立ち、寛永の改革に着手しました。また家光も、光政に幕府政治に関する意見を求め、將軍の日光参詣の際には江戸城の留守居を託されました。正保2(1645)年、東照宮が岡山に勧請されたりなど、光政は將軍家とのつながりを深めていきました。

### 蕃山との改革

光政が藩政に積極的にかかわり始めた頃は、過酷な年貢取り立てなど行っていました。正保2(1645)年、熊沢蕃山(元和5(1619)年〜元禄4(1691)年)を岡山藩に召し抱えて以降、蕃山が修めている儒学(陽明学)の影響を受け儒教的な思想に基づいた「仁政」を理想とし、藩士や庶民の教育に力を入れました。寛永18(1641)年には蕃山を中心とした学習の場と言われる花島教場を開き、慶安3(1650)年には蕃山を知行3千石、番頭に取り立て、屋敷も城下から中洲の花島に移しました。蕃山の陽明学の師匠である中江藤樹の門下の陽明学者や、蕃山の弟泉仲愛らを集めて「花園会」を作らせ、藩士や諸国から集まった浪人の教育に当たらせ、自らも学問に励みました。

承応3(1654)年、備前に大洪水が起こると蕃山の補佐のもと人民救済を行い、地方地行制を改めて藩主権力の強化、郡方支配の改革を行い、新田開発令などで百姓の維持・創出に努めるなどし、のちに承応・明暦の改革と呼ばれる政策を行いました。明暦元(1655)年、蕃山が仕置家老との対立から和気郡寺口村(現備前市蕃山)に隠退したとき、蕃山の願いにより光政は三男八之丞を養子に遣わしました。寛文元(1661)年、蕃山が八之丞との不和から京都に去ると、光政は陽明学のみならず朱子学も信奉し、市浦毅斎〔註3〕ほか多くの朱子学者を岡山に招きました。

### 和意谷の造営



池田家和意谷墓所(池田光政公墓)

寛文5(1665)年、和気郡和意谷(現備前市吉永町和意谷)に儒礼の墓所を造営しました。元々池田家の墓所は京都の妙心寺護国院にありましたが、京都から輝政・利隆ら池田一族の遺骸を船で片上(現備前市西片上)まで運び、八木山(現備前市八木山)の仮宮に安置しました。寛文7(1667)年には造営が本格化し、犬島の石が切り出され、和意谷墓所まで石を運ぶための道が整備されました。同年、

光政は八木山に仮安置していた一族の遺骸を和意谷に改葬しました。この改葬後、石の運び込みや細工が始まり、工事が完了した後の寛文9(1669)年には、光政が和意谷墓所へ訪れ、墓前祭を行っています。その後も和意谷墓所は造営が続けられ、寛文10(1670)年に石垣や石門が完成したとされます。

光政は宗教改革も行い、寛文5(1665)年、幕府の諸宗寺院法度の制定を契機に寺院淘汰を行って領内の寺院を整理し、キリシタン改を寺請から神道請に改め、領内の淫祠を統廃合して代官所ごとに寄宮を作らせ、後に上道郡大多羅村(現岡山市北区大多羅)に合祠するなどしました。

### 閑谷学校の運営

光政は、熊沢蕃山の実弟の泉仲愛(元和9(1623)年〜元禄15(1702)年)、津田永忠(寛永17(1640)年〜宝永4(1707)年)を重用し、寛文8(1668)年には領内123か所に藩士の子どもを対象にした、郡中手習所を設置しました。光政自ら視察した和気郡木谷村(現備前市閑谷)にも郡中手習所を設置させ、寛文10(1670)年、閑谷学校を新設して庶民教育に当たらせました。

また、寛文4(1664)年の頃、評定所〔註4〕の機構を改め、藩政を中心的に差配する家老や側用人の他、諸奉行・諸役人の評定所への出座を認め、家老ら重臣の専権を封じ、同時に人材登用を図りました。この改革に藩の重臣や、当時離藩していた熊沢蕃山は強く反対し、寛文10(1670)年前後には光政と蕃山は断絶状態になりました。

光政は寛文12(1672)年に隠退し、藩主の座も長子綱政に譲りました。その際二男に新田高2万5千石を分知〔註5〕して鴨方藩を、三男には



新田高1万5千石を分知して生坂藩を立てさせ、岡山藩の支藩としました。

光政は隠退後も和意谷墓所や閑谷学校の維持・運営に助言し、その維持存続を泉仲愛、津田永忠に託し、天和2(1682)年に死去しました。享年74歳、和意谷墓所に葬られました。

#### 〔註〕

1 備前監国：池田輝政の二男忠継が5歳で幼少であつたため、兄の利隆が岡山藩を代執政することとなりました。

2 左近衛少将：令外官(りょうげのかん) 左近衛府の次官。正五位下相当

3 市浦毅斎：(いちうらきさい)寛永19(1642)年(正徳2(1712)年)江戸時代前期(中期)の儒者。武蔵の人。池田光政・綱政2代に仕え、藩校総監、郷校閑谷学校学監を務めました。

4 評定所：江戸幕府の最高裁判機関の事を言いますが、ここでは自藩管轄の武士を裁く裁判機関のこと

5 分知：武家の知行の一部を親族に分与すること。分地ともいいます。

#### 〔引用元〕

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年 山陽新聞社

『吉永町史 通史編Ⅱ』

平成18年 吉永町史刊行委員会

『企画展 アートする池田家』

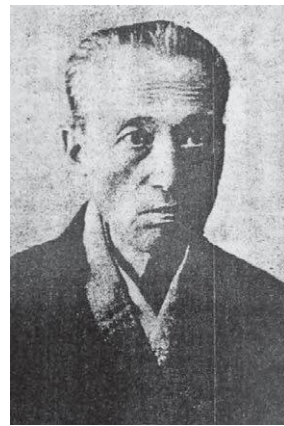
平成26年 備前市歴史民俗資料館

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年 角川学芸出版

## うの えんざぶろう 宇野 圓三郎

郷土が生んだ治山治水の先駆者



宇野圓三郎

### 福田村の溜池での経験

宇野圓三郎(天保5(1834)年(明治44(1911)年)は、現在の備前市福田に、村名主の長男として生まれました。香登の寺子屋で学び、17歳で父から村役を引き継ぎました。村は山からのゆるやかな傾斜地にあり、家の数73戸。段々に広がる田んぼは、谷の溜池「中池」の堤防の決壊により、たびたび水害にあい、土砂や石が流れ込み、村人は苦しめられていました。

苦勞して堤防を高くしても大雨で何度も壊れてしまいます。圓三郎は、村の外、地元の和気郡や岡山藩からも援助を求めるため努力奔走し、なんとか田んぼと「中池」の堤防を直すことに成功しました。そしてそのことが認められ、いくつかの村の荒れた田んぼを再興する「散田興起肝煎(さんでんこうききもいり)」という役目を任せられることになりました。

圓三郎は、同じことを繰り返さないために根本的な対策を考えました。私財を投じ、山から流れ出る水を防ぐ植林や、土砂を防ぐ石積の砂防ダムを作る実験を試みました。それは5年ほどで効果があらわれ、自信を深めることとなりました。

### 『治水建言書』村役から県職員に

44歳で村役を譲った2年後、明治13(1880)年、県内各地で大洪水が起き、岡山・総社・高梁は大きな被害を受けました。また2年後、旭川の京橋付近の様子を見た圓三郎は、土砂で埋まった川底に驚き、船の出入りや町での洪水を心配しました。その年、明治15(1882)年4月、自分の考えを『治水建言書(ちすいけんげんしょ)』に著わし、当時の県知事、高崎五六(たかさきごろう)に提出しました。知事はその案をすぐに採用し、9月の県議会で「砂防工施工規則」が全員賛成で実現されることとなりました。11月に、圓三郎は、その砂防工事の担当者として48歳で県職員に採用され、住居も岡山市南方に転居しました。当時は50歳代で隠居する時代でした。

### 熊沢蕃山の遺訓との出会い

建言書を提出したその夜、圓三郎は訪ねてきた年長のお百姓さんから、偶然、熊沢蕃山の教えを聞きました。そしてすぐに祖父が持っていた本を探し出し、『集義外書』と『大学或問』を読みました。そこには「山を治めることができれば国が栄え、洪水や干ばつなどの災いも少なくなり大きな利益がある」とあり、2世紀も前の備前の地に同じ考えの偉人がいたことを知りました。このことは、自分の考えに自信を持ち、さらに勉強して、世のために尽くそうと決心する大きなきっかけとなりました。

### 県内の砂防工事のために奮闘

県職員となった圓三郎は、翌明治16(1883)年、県内を調査してまわり、急いで砂防工事を行う必要がある賀陽郡見延村、下道郡久代村(現在の総社市)

ほか19か村、上房郡巨勢村（現在の高梁市）、津高郡田地子村（現在の岡山市建部町）を、県が直接工事をする所に決め、他は郡の費用に県の補助金を合わせて工事をする所と決めました。それぞれ現地に出向き、必要性を説明し、技術的なことを熱心に伝えました。

重機のない時代、土地を掘削し石積み of 工事を行うのは、大変な人数と労力が必要で、理解を得るのは非常に難しいことでした。しかし生まれ故郷の福田で村人をねばり強く説得し成功した経験を生かし、一生懸命説明したため、次第に協力を得られるようになり、工事を実現することができました。

以降、25年間に渡る県職員の間も、岡山県内各所で様々な洪水や水害が発生しました。彼の仕事は、それらに対処し未然に防ぐ非常に重要なものでした。

特に、見延村を中心とする砂防工事は、全国に先がけた場所「砂防発祥の地」として大きな成果をあげ、7年後の明治22（1889）年には、石碑「砂防工碑」が建てられ、その功績がたたえられました。

### 治山治水の第一人者に

長年の仕事の中で圓三郎は、砂防の知識と技術、必要性を世の中に広めることも行っています。54歳の時には『治水本源砂防大意』を、70歳の時には『治水殖林本源論』を出版。また、自らの経験や悲哀を和歌に詠んだ『風土治水歌』『水災歎歌』なども出版しています。

明治期の岡山県の重要な砂防工事の多くを手がけた業績は、見延村の他にも建部町中田に「砂防工事の標」、総社市池田と高梁市巨瀬それぞれに「砂防工碑」が建てられたことから伺えます。

またそのことは県外へも知れ渡り、滋賀・三重・岐阜・愛知・富山・高知県などに招かれ、砂防工事

の指導にあたりました。

明治40（1907）年、圓三郎は、73歳という異例の高齢で賞金をもらい県庁を退職しました。翌年、茨城県にある熊沢蕃山の墓に参り、自分に与えられた仕事をやり遂げたことを報告しました。以降も工事に関係した人々に手紙を送り、山を気使う毎日を送りました。

亡くなる前年、最初に砂防工事をした見延村の人々から招きを受け、手厚い歓迎のなか大きな感謝の言葉を受けました。その時、「世の人の誠たのもし、その中の まことの底の知るる嬉しさ」と短歌を詠み、涙を流したと伝えられています。

明治44（1911）年、圓三郎は岡山市南方の自宅で78歳の生涯を閉じました。

昭和31（1956）年には、生まれ故郷の備前市福田の天神宮の脇に、「宇野圓三郎翁遺徳碑」が建てられ、今でも地域の人々がまわりを清掃し続けます。

平成14（2002）年、総社市見延の砂防工事の石積堰堤は国の登録文化財に指定され、周辺は「井風呂谷川砂防公園（砂防学習ゾーン）」として整備され、現在でもその遺業をしのぶことができます。



『治水殖林本源論』1904年



井風呂谷川砂防公園（総社市）



宇野圓三郎翁遺徳碑  
（備前市福田）

### 〔参考文献〕

「郷土が生んだ治山・治水の先駆者 宇野圓三郎物語」（備前市教育委員会・西鶴山公民館 平成15年発行）



## 浦上 村宗

うらかみ むらむね  
二三石城を本拠に、赤松氏の実権を掌握

### 浦上氏

浦上氏は、播磨国浦上庄を本願地とし、播磨・備前・美作の守護赤松氏の重臣として活躍した一族です。「浦上美作守寿像賛」（『天隠語録』）によると、紀氏の出身を自称していました。浦上氏は鎌倉時代末期以降史料に登場し、室町時代、侍所頭人を務めた赤松義則や満祐のもとで所司代を務めた「浦上美作入道」や「浦上備前入道」が知られています。また、一族が備前守護代を務めることが多く、室町時代初期では、一次史料に「浦上宗隆」や「助景」が確認できます。しかしそれらの活動は、断片的に知られるのみで、系図等詳細は不明です。一族から宗峰妙超（大徳寺開山）が出ていますが、妙超の母は赤松円心の姉と言われており、赤松氏と姻戚関係にあったと考えられています。

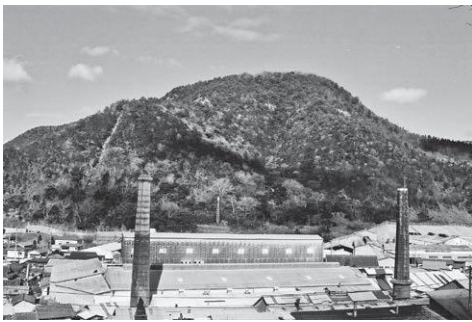
嘉吉元（1441）年、嘉吉の乱によって赤松氏が没落すると、浦上氏も記録に見えなくなります。

かつて、禁闕の変で、旧南朝残党が禁裏から持ち出した三種の神器の神璽を奪回することと引き換えに、赤松家再興を約束された遺臣たちは、吉野奥に潜入し、南朝残党の奉戴する南朝皇胤を殺害しました（長祿の変）。神璽の奪回には失敗したものの、後に神璽が禁裏に戻ったことで、その功績が認められ、赤松氏は再興を果たします。この時、赤松氏が加賀半国とともに与えられたのが備前国新田庄でした。この後、山名氏との相論の上、藤野保・三石保・吉永保を獲得し、さらに応仁の乱に乗じて備前を回復しました。赤松政則はまだ幼かったため、この間、

浦上則宗が代官として赤松氏を代表しました。則宗は、政則が侍所頭人を務めた際は所司代として政則を支えました。備前回復の後、備前守護代は浦上一族の則国や則宗の甥宗助が務め、浦上氏は備前東部を中心に支配を確立していきます。

### 村宗の登場と赤松義村との対立

浦上村宗（生年不詳・享祿4（1531）年）は、備前守護代を務めた浦上宗助の子です。則宗の死後しばらくして浦上家惣領を継いだとみられ、備前三石城と播磨室津を本拠地としました。赤松義村が本格的に執政を開始した永正13（1516）年頃から赤松家宿老として活躍がみられ、宿老の小寺則職とともに「申合」して政務を取り仕切りました。ところがすぐに則職や義村と対立し、永正15（1518）年、三石城に立て籠りました。また、永正16（1519）年、香登城にあった弟の備前守護代浦上宗久が義村と内通し村宗に謀反を企てるという事件が起きました。これについては、家臣宇喜多能家の密告によって事前に防ぐことができたが、同年11月、赤松



三石城址がある天王山

義村は村宗の籠る三石城を攻めました。

この合戦では義村が敗北し、和議を結ぶこととなりましたが、その後も対立は続くこととなります。翌年、義村は村宗方の中村五郎左衛門の籠る美作岩屋城を攻めました。村宗はこの合戦に援軍を送り勝利します。村宗はこの合戦で対立する重臣小寺則職を討ち取りました。村宗はこれに乗じて播磨に侵攻しました。義村を出家させ、家督を息子政村に譲らせました。政村は幼少であったため、その後見人として村宗が実権を掌握しました。義村は出奔し、村宗追討を試みるものの敗戦します。義村の匿っていた足利義澄の息子を將軍として迎え入れるため、和議を結んだ村宗は義村を殺害します。

### 細川高国と摂津出陣

大永2（1522）年、村宗は、淡路から播磨に侵攻してきた浦上村国等旧義村派と対峙していましたが、これに乗じて但馬から侵攻してきた山名氏を追討するため、一時和議を結びました。大永3（1523）年、山名氏の追討に成功しますが、その後も村国等との対立は続きました。この間政村は三石城に匿われました。

大永7（1527）年、管領細川高国は、細川家の内紛に乗じて上洛を試みた細川晴元に京都を追われました。高国は全国を放浪した後、享祿2（1529）年、三石城の村宗を訪ねました。高国の要請により、翌年、村宗は、高国と対立する細川晴元を追討するため、摂津へと出陣します。『一条寺主家記抜粋』によると、高国は片上から摂津に着陣したようです。享祿4（1531）年、摂津天王寺での合戦で、村宗は晴元に内通した赤松政村の軍に背後をつかれ討死しました。

安永3(1774)年成立の『備前軍記』によると、村宗の遺体は備前の着到(備前市木谷)に運ばれ葬られたということです。現在木谷にはその墓と伝わる宝篋印塔が残っており、その区画が市指定史跡に指定されています。法要は播磨書写山円教寺で行われました。法名「桃岳祐林」。

備前市内にある村宗に関連する文化財として、永正18(1521)年に出された八塔寺禁制や、同年に発給された長法寺古文書があります。



浦上村宗の塚(備前市木谷)

#### 〔引用文献〕

「赤松被官浦上氏についての一考察―浦上則宗を中心に―」水野恭一郎

(『史林五四巻五号』 1971)

「守護代浦上村宗考」水野恭一郎

(『鷹陵史学』鷹陵史学会1977)

「浦上村宗と守護権力」畑和良

(『岡山地方史研究』一〇八号 2006)

『和気郡史 中世Ⅱ』

(和気郡史編纂委員会2002)

『和気郡史 資料編 下巻』

(和気郡史刊行会1983)

### 大饗 千代松

大饗千代松(安政4(1857)年〜大正9(1920)年)は、大饗紋三郎の長男として生まれました。明治24、25年頃から備前焼の改良に取り組み、明治27(1894)年には由加神社本宮に備前焼最大の大鳥居も製作しました。伊部村村長野吹秀太郎と農商務省より藤江永孝技師を招聘。さらに出資を募り明治29(1896)年、木村市三郎と備前陶器株式会社設立。創業から廃業まで職人の雇用、経営、工事監督に尽力しました。



由加神社本宮の備前焼大鳥居

備前陶器株式会社(現品川リフラクトリーズ(株)技術研究所)から浦伊部港(現品川リフラクトリーズ(株)岡山工場 第4製造室)間のトロッコ敷線にあたっては、指揮監督を行ったとされています。

### 大饗千代松の墓碑より

土名千代松紋三郎之男也継様父祖業従事於備前焼製作為明治二十九年興同志胥謀創立備前陶器株式會社而大企斯業之改良矣大正九年八月廿六日歿

### 小国 六郎左衛門 (片上小国本陣)

片上の本陣として、代々小国六郎左衛門を襲名している旧家です。

岡山藩主の指定宿であったため、藩からも相当の便宜を与えられていたようです。また、参勤交代の諸大名、高家、幕府役人など貴人の宿泊施設となっていました。

室町幕府の二代將軍足利義詮が上洛の時にその旅館を本陣と言い、宿場札を掲げたことに始まり、主に街道の山越え、渡しなど、分岐点でもあり、江戸時代の参勤交代には機能を發揮したといわれます。寛永12(1635)年の参勤交代実施以降、公的な本陣職となりました。元禄時代この本陣は中二階で、その間数は120室もあり、家の建坪でも千坪以上あったと言われ、使用人も常時50人以上働いていました。



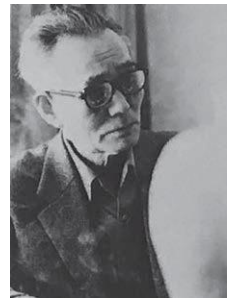
「片上駅本陣小國氏邸趾」碑

この小国家は、先祖が足利尊氏から枇杷をいただいて、その時に受ける物がなく扇子の上に戴いた、それから小国家の家紋を「扇子の上に枇杷」の紋にしたそうです。

小国家は藤原鎌足の子孫とも言われ、越前の小国の庄を賜り、更に東備前の21か村を賜ったということです。



かつら またさぶろう  
桂 又三郎



桂 又三郎

桂又三郎(明治34(1901)年～昭和61(1986)年)は、民俗学の南方熊楠、柳田国男の両氏に師事して、民俗学を専攻しました。昭和3年頃から岡山地方で民俗研究が軌道に乗り始め、中央からも将来を嘱望された嶋村知章氏が参加して、『岡山文化資料』の編集のため、同氏と心を合せ広く県下各地を廻って民俗資料の採集に努力しました。

昭和5(1930)年9月16日、自分の最もよき協力者であった嶋村知章氏が36歳という若さで、急性脳膜炎で死去し、せっかく芽ばえかけた郷土の民俗研究も頓挫し、雑誌『岡山文化資料』も遂に三巻六号を最後として、昭和6(1931)年8月に廃刊しました。その後独力で雑誌『中国民俗研究』を創刊しましたが、これも四号で廃刊となり、引き継ぎ『中国民俗叢書』を九篇まで、『方言叢書』を十篇まで、『岡山縣動植物方言圖譜』を五集まで、『土俗叢書』を一冊出しましたが、遂に矢尽き刀折れて昭和11(1936)年民俗研究を思いきり、備前焼研究に転向しました。

そして、小説家正宗白鳥の弟で万葉学者の正宗敦夫に生活費や部屋の援助を受けながら、民俗学の一部門として古備前の研究に取り組みはじめます。

桂が備前焼研究をはじめた昭和10年ごろにも、もちろん地元岡山附近には備前焼通という人が何人かいました。そうした人達は家伝の備前焼を大切に保存し

て自慢している人とか、その人の趣味で道具屋などからときどき備前焼を買うといったような人達でした。

また別に道具屋のうちにも、とくに備前焼を主として扱っていた商人も何軒ありました。そして、こうした備前焼愛陶家の一群が備前焼鑑賞の主流であつて、そうした人達の説がひと通り世間に通じていたのです。

そのころ備前焼の鑑賞は、こんにちいう伊部手が中心であつて、土味ものの備前手はあまりかえりみられなかったし、また、その鑑賞は伊部手の焼肌を主としたもので、たとえばよく焼けて、黒く紫がかった光沢のある手を「茄子肌」といい、また甲州葡萄のつやのように紫がかった窯変ものを「葡萄肌」といい、また青備前によく現われる窯変で、青紫色に光った手を「とかけ肌」などと呼んで特に喜んでいました。

なお、特に滑稽なのは窯変の一部に、金色や銀色が現れているものがありますが、この手のものは、窯焚きのとき旅人などが見物している前で、小判を窯に投入して、備前焼がいかによくつくかを知らせていた、その小判の金銀がついたものであると、いわゆる通と称する連中が大真面目に語っていましたし、またそれを誰も疑いませんでした。

また、時代にしても、そうした通の勘によつて、これは三百年以前とか、これは五百年以前とかいつて、その時代的な特徴には少しも触れず、ただ、みた目の勘だけで時代を決めていました。

このような状況から備前焼を鑑賞的というわけではなく、学問として取り上げる気持ちになり、それまで殆ど古い陶工の名前などは数人しか知られていなかったで、民俗学の方法論を応用して、まず、伊部付近にある陶工の墓を全部調べ、一方、寺の過去帳や役場の旧戸籍を参照して、一応、陶工の系譜をつくりました。

また別に、窯址から採集した陶片や路傍の瓶、神

社の備前焼唐獅子、窯元所蔵の土型、さては諸家に所蔵されている古備前、また随分嫌われながら美術商の入札会場などで、窯印の拓本を何千となく取りまくつて、そうした窯印と陶工系譜とを結びつけて考証し、昭和12年から13年ごろまでに、実大の拓本集『伊部焼陶印集』5冊を世に出しました。

古備前の窯址を訊ねたり、自分自身発見したりなどとして、熊山を中心とした一群の古窯址(鎌倉時代)から、また邑久郡の須恵器や土師器(奈良時代)の窯址、赤磐郡の奈良・平安・鎌倉時代の窯跡などを丹念に調査して歩きました。

それから、岡山県下各地にある寺院址から時に発掘される骨壺や、山城址から採集される水瓶などを調べて、そうした資料の相互的関連性を、或は縦に、或は横に繋いで、はじめて備前焼の時代分類と編年を発表しました。

永年にわたる備前焼、特に物証による古備前の研究、膨大な資料の発表は、備前市が誇りとしている備前焼の紹介、発展に多大の寄与をされています。

主な著書

昭和11年～昭和39年 雑誌『備前焼』41冊

昭和12年 『伊部焼陶印集』

昭和16年 『時代分類備前焼名品図録』

昭和26年 『片上町史』

昭和29年 『古備前名品物語』

昭和36年 『古備前名品図譜』

昭和48年 『時代別古備前名品図録』

など、備前焼に関する多くの著書を刊行しました。

〔引用元〕

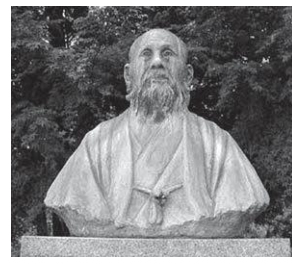
『桂又三郎 文献・自序集』桂又三郎

昭和61年 岡山県備前焼陶友会

## かとう 忍九郎

三石ろう石に賭けた生涯

〔石筆、耐火れんがが開発し産業振興〕



加藤忍九郎像

J R山陽線三石駅（三石）から西を望むと、間近に近代化産業遺産に認定されている三石耐火煉瓦株式会社社の八角煙突がそびえ立っています。その向こうにはろう石を豊富に産出した台山のなだらかな山容。石筆、耐火れんがの開発、製造を通して三石の発展に貢献した加藤忍九郎の生涯を含んだ風景です。

江戸初期の仏師八木浄慶が発見した三石のろう石は彫刻材として用いられましたが、明治維新後は教材の石筆の材料になり、さらに耐火れんがの原料となりました。

石筆はチョークのような筆記用具です。明治5（1872）年に公布された学制で、それまでの筆、墨に代わって導入されました。石盤に書いた文字や数字は布で拭くと簡単に消せ、授業の必需品となりました。

岡長平『加藤忍九郎伝』は次のようなエピソードを伝えています。天保9（1838）年、野谷村（現三石）の名家に生まれた忍九郎は名主や村長を務め、明治5年、岡山県庁で中国製の石筆に出会います。あまりに粗悪で高価なのに義憤を感じた忍九郎、「こ

んなろう石なら三石にいくらでもある。これぐらいの仕事なら造作なくできる」と研究に着手し、高品質で安価な国産石筆の製造に成功。全国で販売され、三石の名を高めました。

次に取り組んだのが耐火れんがです。石筆を作る過程で大量に発生するろう石のくずの処理に頭を悩ませていた忍九郎に「耐火度の強い三石のろう石は、耐火れんがの原料に適している」との情報が寄せられました。ここでも忍九郎は企業家魂を発揮、ろう石と備前焼で培われた伝統的な窯業技術を結合させて、明治19（1886）年にろう石れんがの試作に成功。同23（1890）年、三石煉瓦製造所（のちの三石耐火煉瓦）を設立して製造を始めました。同31（1898）年には原料のろう石を確保するため、ろう石山とも呼ばれた台山を買収しています。

石筆はのちに鉛筆に取って代わられましたが、耐火れんがは備前市の基幹産業に発展。今も国内生産量の3分の1を占め、地域経済を牽引しています。

忍九郎のもう一つの地域への貢献は、山陽鉄道（J R山陽線）の誘致に尽力したことです。原料や製品の輸送には鉄道は不可欠、三石の発展に欠かせないと誘致運動に奔走、明治23（1890）年に兵庫から三石への開通を実現させています。三石駅前の道路には今も、原料や製品を運んだ当時の馬車道の石畳が残っています。

忍九郎は大正7（1918）年、81年の生涯を終えました。忍九郎を顕彰する銅像が昭和43（1968）年、三石体育館の入り口に近い場所に建てられています。

### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## かねしげ 陶陽

（本名 金重 勇）

備前焼初の人間国宝

〔細工から茶陶へ、隆盛導く〕



金重陶陽

旧山陽道筋に備前焼の店が並ぶ伊部の街並み。その一角のわら屋根の陶家に昭和31（1956）年3月下旬、吉報が届きました。家の主、金重陶陽（明治29（1896）年〜昭和42（1967）年）を重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定する知らせでした。備前焼作家の人間国宝は陶陽が初めて。その後、藤原啓、山本陶秀、藤原雄、そして現在の伊勢崎淳さんと続きます。5人の人間国宝を輩出した窯場はほかにありません。陶陽は備前焼を現在の隆盛に導いた「中興の祖」と仰がれています。

陶陽は、備前窯元六姓の一つ金重家の分家の長男として明治29（1896）年に生まれました。伊部尋常高等小学校を卒業後、14歳でこ師（細工物を作る陶工）の父榎陽（はいよう…本名横三郎）について作陶を始めました。花鳥、動物などの細工物を手掛け、22、23歳ごろには既に伊部を代表するで師のひとりになっていたということです。

無釉焼き締め陶として日本六古窯に数えられる備前焼は、須恵器を源流として平安時代末期に生産を開始し、室町時代に壺、すり鉢、甕などの日用雑器



が全国の市場を制覇しました。桃山時代には茶の湯文化を背景にわび、さびの美意識を備えた茶器が珍重され、江戸時代になると岡山藩の保護のもとで細工物が盛んに作られました。しかし、明治維新後、窯元六姓制度が廃止されるなど岡山藩の庇護を失い、備前焼は冬の時代に入ります。叔父の金重利三郎らが土管製造を手掛け、陶陽も彩色備前、青備前、閑谷焼などに新たに挑戦しています。

そんな中、細工物に行き詰まりを感じた陶陽が大きく活路を求めたのが、桃山期の備前陶の復興でした。昭和初期の頃です。日清、日露の戦争、第一次世界大戦を経て国力を増した日本では、伝統文化が見直され、自由、豪華で、わび・さびを含む桃山文化のブームが起きていました。陶芸家による古窯跡の調査・研究も進んでいました。陶陽も古備前に傾倒し、細工物からろくろによる土味物の茶陶へと転換していきます。

桃山備前陶の所蔵家を訪ねては実物に触れる一方、13歳下の弟素山（本名七郎左衛門）を助手に古備前技法の復興に取り組み、陶土、窯の構造、窯詰め、焼成法を研究。桃山風の土味を再現するために、土は田土を水簸（すいひ）せずに植などで碎いて足で踏んで練り、何年も寝かせてから使います。窯の構造も小さな登り窯で大窯のような焼成効果を出すように改良するなど工夫を重ねました。

陶陽は並外れた社交家であり、多彩な交遊も備前焼に新風を吹き込みました。津の川喜田半泥子、美濃の荒川豊蔵、萩の三輪休雪と「からひね会」を結成（昭和17年）するなど全国各地の文化人、陶芸家らと親しく交わり、戦後、陶陽の窯場を訪れたふたりの芸術家、北大路魯山人、イサム・ノグチはのちの備前焼の食器づくりや造形作品に大きな影響を与

えました。また、人間国宝認定の翌年には米国3か所で作品展を開催、晩年2度にわたりハワイ大学の夏期大学講師を務めるなど、備前焼の国際化に先鞭をつけました。素山、藤原啓、山本陶秀らと備前窯芸会を結成して後進を指導、日本工芸会や地元支部の設立に参画し、伝統工芸の発展に尽くした功績も大きいものがあります。

陶陽は昭和42年11月、71年の生涯を閉じました。その7か月前、全国植樹祭出席のため来岡された天皇・皇后両陛下は伊部公民館で陶陽のろくろ実演を見学、その時の印象を皇后陛下は、

孫のごと 若きに轆轤 まはさせて

土のたくみは 鉢つくりなす

と歌に詠まれました。

「土にすなおに、火にすなおに」を信条に、衰退しかけた伝統の焼き物に向き合い、再興を牽引した陶陽。現在の備前焼は陶陽が耕した土壌の上に花開いています。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

かねしげ  
**金重 利三郎**  
りさぶろう

明治維新後の日本は慌ただしく近代産業が盛んとなります。こうした中で備前焼も産業化に向けて旧窯元らが会社を設立するなど新たな事業展開を行います。が、どれも僅かな期間の操業で失敗に終わっています。

そうした中、備前窯元六姓の一氏、金重家の金重利三郎（安政5（1858）年～昭和2（1927）年）が、常滑より陶工を招聘、土管焼成用の窯を築かせ

ます。

利三郎の墓碑には「土管郷人嘲笑其無謀為君不毀顧嘗専心随事辛苦経営」とあり、備前土管の製造・経営に乗り出した頃の人々の冷やかな様子が伺い知れ、その経営を軌道に乗せるまでの苦悩が偲ばれます。

新窯を築いて以降、常滑の陶工より伝授された土管の製造を始動。利三郎は三村久吾、日笠恒太郎らと「伊部商会」を設立し、備前土管の販路拡大、備前における土管の規格化と量産体制の基盤を作り、備前における「土管元祖」として、その偉業が墓碑にも刻まれています。

#### 〔参考資料〕

『備前土管～冬の時代、もうひとつの備前～』

備前市歴史民俗資料館

くまざわ  
**熊沢 蕃山**  
ばんざん

才徳兼備の天才的経世者  
～隠棲地でも田畑開墾、教育振興～



熊沢蕃山

森閑とした空気がみなぎる真言宗の古刹・正樂寺（備前市蕃山）。道ひとつ隔てた西隣に、堀で囲まれた一角があります。「息游軒遺址碑」と書かれた石碑。ヒノキが2本、亭々とそびえています。江戸時代の儒学者で備前岡山藩の儒官だった熊沢蕃山（元

和5(1619)年(元禄4(1691)年)の屋敷跡は、備前市の文化財に指定されています。

蕃山は名君と称賛された岡山藩主池田光政に二度にわたって仕え、二人三脚で仁政を推進しました。最初の仕官は16歳から20歳まで。一度は退任して祖母の古里の近江桐原村(滋賀県近江八幡市)に居住。近江聖人と呼ばれた儒者中江藤樹に学んだ後、27歳の時、再び出仕し、39歳まで仕えました。蕃山の名声が高まったのはこの再仕官の時で、知行3千石、鉄砲組番頭(侍大将)に抜擢され、光政の側用人として、教育の振興、洪水・飢饉時の領民救済、旭川の洪水時の放水路構想の考案(後に津田永忠が百間川を開削して実現)、知行地の八塔寺での農兵制の実践など目覚ましい功績を上げました。

岡山藩を退き、もう一つの知行地、和気郡寺口村(のちに蕃山村に改称)に隠棲したのは、明暦3(1657)年から寛文元(1661)年までの4年間です。この間、蕃山村から麻宇那村にかけて流れる大谷川の川筋を付け替えて日当たりの良い田畑を開き、米作りを促進。また、屋敷周辺の学舎で村の男女に手習いから人の道まで指導しました。蕃山の「民こそ国の本なり」の理念がこの地で体现されています。

藩からの隠退は保守派の家老たちとの確執が理由とされ、蕃山自身はやがて光政の元に復帰する願いを持っていたとされます。両親や弟妹の墓を屋敷近くに造っており、蕃山村を終焉の地と考えていたふしもうかがえます。しかし、そうした願いはかきませんでした。備前退去後は、幕藩体制の批判者として幕府から監視の目を向けられ、京都、明石などを流浪、岡山藩政を批判して光政とも不仲になり、古河(茨城県古河市)で73年の生涯を終えました。しかし、彼の遺した『集義和書』『大学或問』などの著書は読み継

がれ、幕末の志士たちに影響を与えたと言われます。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

### 黒田 幹一 かんいち



黒田幹一

黒田幹一(明治15(1882)年(昭和63(1988)年)は、邑久郡鶴海村(現・備前市鶴海)出身の語学研究者・考古学者・政治家です。黒田家は鶴海村の旧家であり、幹一の父久一郎も村長や県議会議員を務めたということです。幹一は第六高等学校(現・岡山大学)を卒業後、東京帝国大学文学部独逸文学科へ進学しました。大正2(1913)年の卒業後、通信省(郵便、通信、運輸等を管轄した中央官庁)嘱託職員として北京で暮らしました。大正8(1919)年には京城医学専門学校助教授及び朝鮮総督府の通訳官を兼任しました。その後、京城医学専門学校の教授、京城帝国大学予科教授を歴任しました。昭和5(1930)年には、ドイツ語・ドイツ文学・語学教授法研究のため、ドイツ・イギリス・アメリカに留学して研鑽を重ね、昭和6(1931)年に引き続き京城帝国大学予科部長に就任して終戦までを過ごしました。

ドイツ語教授として教鞭をとりながら、『マリ

ア・マゲダレーネ』(F・ヘッベル原作 大正3(1928)年)の翻訳等、ドイツ文学の和訳にも携わりました。その傍ら、古代貨幣へ関心を寄せ、特に和同開珎の研究をライフワークとして、論文「鑄貨和同開珎」を『貨幣誌』に掲載するなど、大正期以降多くの論文を発表しました。

終戦後は出生地の鶴海村に引き揚げ、昭和22(1947)年から昭和30(1955)年までの8年間、鶴山村の村長として村政に携わりました。昭和38(1963)年には備前町文化財保護委員会委員長として文化財行政に尽くし、昭和54(1979)年8月に岡山県三木記念賞の文化部門を受賞しました。また、国立博物館の所蔵物の鑑定も行っていました。昭和62(1987)年にはそれまでの地域行政や歴史研究への貢献もあり、郷土の偉人として備前市民栄誉賞を受賞しました。

#### 〔参考文献〕

・東鶴山風土記

### 佐藤 陶崖・陶亭 さとう とうがい とうてい

佐藤陶崖(天明5(1785)年(天保14(1843)年)は、和気郡伊部村(現備前市伊部)の陶工・医学者です。陶崖は雅号であり、幼名は次郎吉、諱を信睦、貫一郎、与惣兵衛とも名乗りました。佐藤家は17世紀以来、製薬業・製陶業を生業としていたようです。特に佐藤家の秘伝薬「延寿真玉」(口偏に愈)散はリウマチ、脚氣を主として万病に効能のある妙薬として備前地域内外に広く知られており、江戸時代から昭和時代初期まで製造されました。陶崖は



15歳から本格的に製陶に携わったとみられ、「佐藤次郎吉勝治 十五歳作」などと記銘された土型が現代まで残されています。一方では漢方医である叔父与三兵衛の薫陶を受けて、医学知識を深めていったとみられます。若いころには南画の大家である小橋平咸や、書の大家である武元登々庵・君立兄弟に師事して、芸術的素養を磨きました。

医師としての陶屋は、室津の医師名村金水に師事し腹候を学び、室津に立ち寄った蘭方医吉雄永清に蘭学を学んだとされます。彼が研究のために書き写した『傷寒論』『方選』『万極』といった医学書の写本や、彼が著した診断・投薬記録も多数伝世しています。陶屋は研究の末、文政8(1825)年頃には「疾病は体液が渋滞して粘液となり水垢のごとく幾万の小虫が生じて発病するもの」とする「粘液主論」を展開し、『粘液図式』『日本医蘇』等の書籍にまとめました。和・漢・蘭の医学を積極的に取り入れ治療に応用する陶屋の姿勢からは、彼の医学への熱意が見て取れます。陶屋は天保10(1839)年に伊部村の名主に就任しています。農村の経済的困窮と、それによって引き起こされる社会不安に対して心を痛めた陶屋は、『経済録』『墮胎訓戒』『四国巡拝教路草帋』といった啓発書を多数刊行しました。

佐藤陶亭(文化14(1817)年～明治10(1877)年)は、和氣郡伊部村の陶工・医者で、佐藤陶屋の子です。通称は恂太郎、名は信恂、字は恂夫等と称しました。閑谷学校に通って有吉謙斎に学び、医学は明石希范の教えを受けたといえます。成長後は薬の販売で全国各地を旅し、佐藤家の秘伝薬「延寿真諭散」を広めたようです。父陶屋と同じく陶芸に優れており、嘉永2(1849)年には岡山藩から助細工人に任命されていました。また、書画への造詣も深く、文人の安

井槐堂や江馬天江らとも交流していました。

陶亭は教育者としても熱心な活動を行っていました。幕末・明治初期には自宅を「学而学館」として開放し、明治5(1872)年の学制頒布以後は伊部村西分の小学施設として子どもたちの教育に寄与しました。やがて伊部村東分の日幡家に所在していた小学施設と合併し、齊部小学校(現 伊部小学校)となりました。

#### 〔参考文献〕

- ・佐藤陶涯
- ・和氣郡の医療史
- ・閑谷学校ゆかりの人々

さとむら きんぞう

### 里村 欣三(本名 前川 二享)

#### 自由を追い求めた小説家



里村欣三  
(加子浦歴史文化館所蔵)

#### 生い立ちからプロレタリア文学者になるまで

明治35(1902)年～昭和20(1945)年の小説家。和氣郡福河村寒河(現備前市日生町)に、前川作太郎の二男として生まれました。親類に軍人や資産家が多く、裕福な家に育ちました。父作太郎は、彼に陸軍幼年学校(註1)を三度受験させましたが、軍人を嫌いその都度白紙答案を出したということです。15歳の時に関西中学校を退学し、軍人一族と継

母への反発から家を出て、職工、人夫、電車従業員、土木労働者など各種の職業を転々としながら各地を放浪しました。

大正12(1923)年、徴兵検査に合格し、入営が決まると、徴兵を忌避して入水自殺を装いました。戸籍を抹消された彼は偽名として「里村欣三」と名乗り、満州(現中国東北部)へ渡って放浪しました。翌年帰国して上京し、プロレタリア文学(註2)運動に参加し、葉山嘉樹や林房雄と共に「文芸戦線」(大正13年創刊)の同人として本格的に小説を書くようになります。その第1弾として発表されたものが『苦力(クローリー)頭の表情』です。これは、満州での放浪生活をもとに、その中で見つけた無産階級の連帯感を描いたものです。貧困のどん底の生活を描きながらも、屈託のない明るさをたたえる作風で書かれています。この作品によって、彼はプロレタリア作家として認められるようになりました。昭和2(1927)年『疥癬(かいせん)』『娘の時代』『放浪の宿』『デゴマー』などを発表し、中堅作家として活躍しました。

#### 軍国主義と欣三

昭和3(1928)年、26歳で平林たい子(註3)の世話で結婚しました。長女が学齢に達したにも関わらず無国籍であり、学校に行くことができないために、昭和10(1935)年に徴兵忌避の逃亡兵として自首し、義務を果たして失踪宣告を取り消され復籍しました。昭和12(1937)年7月、日中戦争が開始し、動員令が下ると欣三は陸軍特務兵として2年間、中国各地を転戦しました。除隊して戻ると、自伝的小説『第二の人生』を執筆し、発表。これは、非常時局の重圧に耐えかねて思想を捨てて主義を離れ、生活の信条を失って動揺する一兵士の新しい人

生追及の姿を描いた小説です。欣三は生きるために軍国主義に飛び込んでいったのです。

昭和16(1941)年太平洋戦争が勃発し、彼は報道班員としてマレー、ボルネオへ従軍しました。その記録として『熱風』を朝日新聞に連載し、以後戦争文学作家として名を成すこととなります。昭和18(1943)年には「中央公論」に『青年将校』を、「文学界」に『キスカ撤収作戦』を発表します。ついで『河の民(オラン・スンガイ)』を刊行します。

その後、マリアナ沖、サイパン島、レイテ沖で日本は敗北を重ね、海路渡航がほとんど絶望的となった昭和19(1944)年末、欣三は再びフィリピン派遣を志願しました。翌年すでに敗北色の濃いフィリピンへ派遣され、昭和20(1945)年2月、ルソン島の第一線で戦闘報告書を執筆中に敵機の爆撃を受けて戦死しました。享年42歳。

# 〔註〕

1 陸軍幼年学校：陸軍の士官生徒となる幼年生徒を教育する学校。入学資格は13～15歳、おおむね中学1～2年程度の学力の入学試験を行いました。

2 プロレタリア文学：プロレタリアート(労働者・農民)の立場から、その思想や生活を描き現実を發展させようとする文学運動で、第一次世界大戦後の労働運動・社会主義の發展に伴って現れました。1921年創刊の『種蒔く人』に始まり『文芸戦線』『戦旗』などを中心に展開。

3 平林たい子：当時欣三と同居人していた小堀甚二(明治34(1901)年～昭和34(1959)年)、日本の作家・評論家・社会運動家でプロレタリア文学者)の妻。

# 〔引用元〕

『岡山ゆかりの作家たち―その青春の彷徨を追って―』

片山由子 平成13年 近江文芸社

『吉備路をめぐる文学のふるさと』編集委員会

平成22年 財団法人吉備路文学館

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

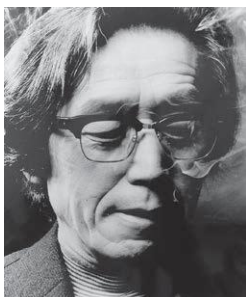
平成6年 山陽新聞社

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年 角川学芸出版

しばた れんざぶろう  
柴田 鍊三郎(本名 斎藤 鍊三郎)

「眠狂四郎」生んだ無頼派文士  
「今も踊り続けられる」鶴山音頭」



柴田鍊三郎

「へつらつたり 媚びたり 小ずるく陰に立ちまわったり―そういうことはすまい」―万成石の桜色の肌に刻まれた言葉は、孤高の剣士・眠狂四郎を生んだ小説家の生き方をしのばせます。

「シバレン」こと柴田鍊三郎(大正6(1917)～昭和53(1978)年)の文学碑が、生家から東へ約400m離れたところにある鶴海児童遊園地(鶴海)の一角に建てられたのは平成28(2016)年です。

柴田は大正6(1917)年、邑久郡鶴山村鶴海(現

備前市鶴海)に漢学の造詣深い日本画家の三男として生まれました。子どもの頃からかなりのわんぱくぶりを発揮したようです。興入れあいさつの花嫁の裳裾をはぐりあげる、隣家から鶏を盗み出して海に放して溺死させる―などのエピソードが伝わっています。

鶴山小学校(現・東鶴山小)を卒業すると、旧制岡山二中(現岡山操山高)を経て慶應大学支那学科に進学。在学中から執筆活動を始め、師の詩人・小説家佐藤春夫の勧めで書いた「デスマスク」が昭和26(1951)年に芥川賞候補、翌年には「イエスの裔」で直木賞を受賞し、作家の地位を確立。忍者小説「赤い影法師」や岡山生まれの主人公の破天荒な立身出世物語「図々しい奴」など数多くのベストセラーを世に送りました。

ですが、柴田の人氣を不動にしたのは、なんといつでも眠狂四郎という稀代の時代小説のヒーローを生み出したことです。昭和31(1956)年、「週刊新潮」の連載小説『眠狂四郎無頼控』から始まったシリーズは、柴田の代表作となり、市川雷蔵主演で映画化もされました。

眠狂四郎のニヒル、虚無を生み出した背景としてよく指摘されるのが、戦時中の軍隊体験です。昭和20(1945)年4月、台湾・フィリピン間のバシー海峡で乗った輸送船が潜水艦に撃沈され7時間海上を漂流、九死に一生を得た壮絶な体験は柴田の死生観に決定的な影響を及ぼし、創作だけでなく、反權威でニヒル、直言を貫く無頼派文士の生き方につながったとされます。

帰郷の機会はあまりありませんでしたが、母校の後輩に「自分はいったい何が好きかということ早く見つけることです」とアドバイスした手紙「鶴山小学校の幼き諸君へ」は東鶴山小に大事に保管され、



作詞した「鶴山音頭」は今も毎年、地区の運動会で踊り続けられています。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## 清水紫琴

女権拡張のパイオニア  
～女性ジャーナリスト第一号。小説、評論も～



清水紫琴  
(出典:近代日本人の肖像)

清水紫琴（本名…豊子 慶応4（1868）年～昭和8（1933）年）は明治中期に活躍した備前市出身の小説家です。自らの破婚に触発された処女作「こわれ指環」は岩波文庫で今も読むことができます（『日本近代短篇小説選 明治篇1』）。評論では女性の地位向上、女権の拡張を一貫して主張し続けました。雑誌の主筆を務めるなど日本の女性ジャーナリストの先駆けでもありました。

紫琴は慶応4年が明治と改元された1868年に和気郡片上村西片上（現備前市西片上）で生まれました。清水家は和気郡清水（現和気町清水）の大庄屋格の農家で、祖父建左衛門敬義（号霽月）の代に西片上で家塾を開きました。『片上小学校百年誌』には、近隣の子弟、男子110名、女子55名を教えたとあり、明治5（1872）年の学制頒布とともに

片上小学校がいち早く設けられる基盤となった、と記してあります。

その祖父は明治3（1870）年に亡くなり、漢学、国学、さらに理化学にも造詣が深かった父の貞幹は翌年、京都府に出仕、一家は京都に移住しました。紫琴が備前にいたのは幼少期の4年足らずに過ぎません。

13歳で京都府女学校小学師範諸礼科を卒業。明治18（1885）年、17歳で民権家の代弁人（現在の弁護士）と結婚するも4年後に離婚。翌23（1890）年、上京して『女学雑誌』に記者として入社、すぐに主筆兼編集責任者に抜擢されました。わが国の女性ジャーナリスト第一号でしょう。

『女学雑誌』は開明的な女性雑誌で、紫琴は同誌を舞台に活発な文筆活動を展開しました。評論「泣いて愛する姉妹に告ぐ」「当今女学生の覚悟如何」など、第一回帝国議会（明治23年）召集に先立って配布された衆議院規則案に婦人傍聴禁止条項があるのを鋭く批判したり、女性にとって不幸、悲惨である結婚の実態に対して女学校教育を受けた女性こそが改革に立ち上がらなければならないと説くなど、女性の地位向上、権利伸長に向けて論陣を張りました。小説においても「こわれ指環」で、親の言いなりでした結婚で夫に隠し妻のいることを知り、女権論に目覚めていく女性を描き、「移民学園」では部落問題を扱い人権思想、社会問題に深い関心を寄せています。

「元始、女性は実に太陽であった」で始まる雑誌『青鞥（せいとう）』を女性解放運動家平塚らいてうらが創刊したのが明治44（1911）年であることを思えば、紫琴は女権拡張のパイオニアと言えるでしょう。

紫琴は明治24（1891）年11月、古里の片上でひそかに男子を出産しました。父親は自由民権家の大井憲太郎で、子は長兄謙吉夫妻の養子として育てら

れました。親しくしていた社会運動家の景山（福田）英子も大井の子供を産んでいたことを紫琴はのちに知りました。出産後、体調を崩して東京で療養していた紫琴を、帝国大学農科大学の助手をしていた謙吉の同僚である助教教授古在由直（元治元（1864）年～昭和9（1934）年）がしばしば見舞い、二人は明治25（1892）年に結婚しました。古在は足尾銅山鉱毒事件に際して精密な土壌分析を行い、被害農民の主張の正しさを科学的に立証した農芸化学者で、のちに東京帝国大学総長を務めた人物です。

紫琴は明治34（1901）年1月発表の随筆を最後に一切、筆を絶ってしまいます。再婚相手の古在が紫琴の文筆活動を好まなかったためとも言われています。

宇佐八幡宮に程近い紫琴の生家跡は、現在歯科医院になっていて往時をしのぶものはありませんが、祖父と兄の墓が市営恵下墓地近くの志賀家墓所の一角に並んで建っています。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## 釋尾 弘邦

昭和を代表する仏画家

#### 誕生

日本においては平安時代、特に密教が取り入れられて以降、仏教絵画も様々な修法に用いるための仏具の一つとして盛んに制作されるようになります。また、別尊曼荼羅のように、様々な図像の仏画が日本独自で誕生していきます。祈りの対象として描かれるこれら仏教絵画は、絵仏師、画僧、仏画家と言

釋尾春仍は、現在の備前市西片上出身で、5歳頃に西片上にある真光寺の僧侶、釋尾春理（しゃくおしゆんり）の養子に迎えられ、僧籍に入り、高野山大学及び哲学館（現東洋大学）に学びます。真光寺第18代住職となるも、哲学館では創始者 井上円了の薫陶を受け、僧籍を子弟に譲り、渡鮮後に出版事業等を行った人物です。



釋尾弘邦

われる存在によって、制作されてきました。仏の姿を描くには、仏典（ぶつてん）、儀軌（ぎぎ…經典における仏・菩薩・天部などの造像、安置、供養の規則）に従って、忠実に描くことが求められました。近世以降も、様々な画家たちが仏をモチーフとした制作に取り組み、なかでも狩野芳崖、村上華岳、堂本印象等の画家が、仏の姿を作品として昇華しようとしています。

昭和において、伝統的な仏画の追求と独自の尊像を描くことのできる随一の仏画家として、市内にもその作品が残る釋尾弘邦（明治41（1908）年〜平成11（1999）年）が挙げられます。釋尾弘邦（以後、弘邦という）は日本の植民地下であった朝鮮の京城（現ソウル特別市）に、「朝鮮及満州社」を経営した釋尾春仍（しゃくおしゆんじょう）、同郷出身の一枝を両親に生まれました。

### 拝める仏さまを描く

春仍の影響を受けた弘邦は、インド哲学を志すが挫折、画家を志すこととなり、日本画家 西山翠嶂（にしゃま すいしょう）に学ぶとともに、歌人と謝野鉄幹の兄、和田大円に京都の仏画家・武藤有邦を紹介され師事。師である有芳は、仏画家・北村秀隆に師事しており、秀隆は巨勢派の仏画家であったために、この流派技法を弘邦は継承したものと考えられます。

弘邦より先に武藤有芳に師事し、仏画を描いていたのがその後、妻となる藤井タカです。タカも仏画家を志しており、「青蓮」と号して戦前・戦中・戦後と弘邦や子供達の生活を養うために仏画を描いて生計を立てました。弘邦の生涯を最も近くで支え続けました。



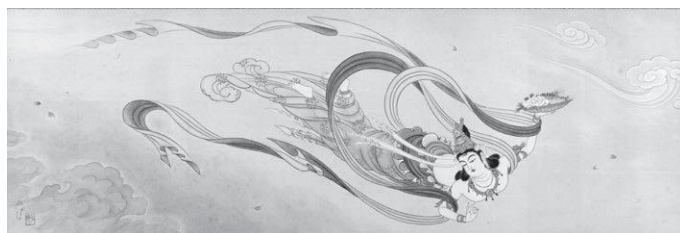
《金剛塗香菩薩》（高野山讃岐別院蔵）

京都絵画専門学校在学中も、仏典儀軌について研究を深め、卒業後は仏画家として生きていくことを決意しましたが、昭和20年に出征し、ソ連軍の捕虜となります。この捕虜生活の中でも、求められては仏画を描いていたということです。

帰国後は、春仍の出身地で、妻タカが子供達と疎開していた岡山に住みます。しばらくして移り住んだのが岡山市東区浅越にある松寿院の庫裡でした。昭和45年、落雷によって松寿院は焼失しますが、それ以前に隣接する加納院に移り住みます。ここは高台にあり、木々に囲まれ両院とも隠棲生活には最適な環境でした。弘邦は「無一物中無尽蔵」（人間は無一物が本来の姿であるから、それに徹したときに、一切が無限に出現する自在の境地が開けること）をこの地で実践しながら、礼拝仏の制作に打ち込みました。

弘邦は特別な用事が無い限り、何ヵ月も山を降りず、画技専心の日々を過ごしました。仏画制作においては、若い頃から培った伝統技法を基本としながら、独自の礼拝仏の姿を探究した生涯でした。

仏画家としての処女作、隨心院《仁王經曼荼羅》から、代表作である高野山金剛峯寺研修道場の《金剛界大日如来》《胎藏界大日如来》などに至る尊像、一つ一つの表現と大作の背景に用いられる青緑は、



《飛天》（歴史民俗資料館蔵、歳森康正氏旧蔵）



壮大な宇宙をも感じさせ、「釋尾ブルー」とも称すべきものです。

近年に見られない、鮮明かつ人々の琴線に触れる独自の仏画。後世に誇ることのできる礼拝仏として、今後も各々の場所で受け継がれていくことでしょう。

#### 〔引用元〕

『「拝める仏さまを描く」釈尾弘邦』

2021備前市教育委員会

## 武元 君立

閑谷学校教授・農民学者



武元 君立  
(吉永美術館蔵)

### 幼少期の君立

武元君立(明和7(1770)年〜文政3(1820)年)は、吉永町の農民学者・村役人・閑谷学校教授です。名は正恒、字は君立。武元登々庵の弟。和氣郡北方村(現・備前市吉永町岩崎)の名主武元和七郎の二男として生まれました。安永5(1776)年、当時7歳だった君立は兄の登々庵とともに、父和七郎に連れられて、閑谷学校に入学し、当時の閑谷学校の教授であった有吉臓器(和介)(享保19(1734)年〜寛政12(1800)年)の指導を受けました。閑谷学校に6年ほど在籍し、彼は有吉臓器を心から尊敬していました。有吉臓器は、人間の理性や上下関係を重んじる朱子学を第一とし、閑谷学

校で教育を施しました。

臓器が再興した閑谷学校では、素読、習字などに取り組み、生徒たちの自主学習も盛んであったようです。君立はこの環境の中で天賦の才能を伸ばし、学者としての素地を養いました。

天明2(1782)年の頃は、兄の登々庵とともに閑谷学校に在学していましたが、同年に天神講〔註1〕が始まると、兄の登々庵、従兄の明石順治(赤石順治(景誼)明和元年(1764)年〜文化12(1815)年)とともに講釈人となり、熱心に指導に当たりました。当時君立はわずか13歳でした。寛政5(1793)年24歳になった君立は、学問をさらに深めるため江戸に上り、昌平黌(昌平坂学問所)の長官である大学頭(だいがくのかみ)・林述斎〔註2〕の門下となりましたが、塾の卒業後、儒者の前途に絶望し、病弱な兄・登々庵が家業を継ぐことが困難であったこともあり、学業をあきらめ、在塾半年で北方村へ戻り自分が家業と名主役を継ぎました。

### 『勸農策』を論じる

君立が帰国すると兄の登々庵は大坂へ出て筆売りをしながら書道の勉強を始めました。君立は暫く父の名主役を手伝い、家業に専念していましたが、寛政10(1798)年頃から再び学問への情熱が甦ってきます。寛政11(1799)年に母・花子が他界し、父・和七郎が隠退したため、君立は幼名の勇次郎を、武元家惣領の名である与兵衛に改め、正式に北方村の名主になりました。文化10(1813)年には閑谷学校の教授役となり、息子の平太郎に名主役を譲るまで13年間村役を務めました。この間の君立の村役人としての働きぶりは正確には分かりませんが、彼の優れた農政論『勸農策』や史論である『史鑑』は、

村役人としての彼の経験により記されている部分もあると思われます。

『勸農策』は上下二巻からなり、上巻は岡山藩領の村の疲弊、農民困窮の有様を具体的に述べてその原因を追及したものであり、下巻は深刻な農村問題の解決策を論じたものです。農民疲弊の原因は、重税と在方商業であるとし、そのために貧富の差が生じ、貧民を追い詰めているといっています。その防止策は在方商業の抑制と減税しかなく、減税の方法として、城下で働かず生活している家中武士たちをそれぞれの知行地に移住させ、土着帰農させる、ということ説き、財政緊縮の根本的対策を述べています。また、君立は百姓のたまの贅沢を許し、村民が悪行に走るのは極貧という背景があることを述べ、地主・村役人として貧農と生活を共にした君立ならではの農民観であるといえます。

当時、岡山藩士で儒学者の湯浅新兵衛明善(湯浅常山〔註3〕の子)を中心に寛政の改革がなされており、君立はこの『勸農策』を、新兵衛を介して藩主池田斉政に奉ったものと思われます。新兵衛はたびたび武元家を訪ね、君立と新兵衛は身分を超えて親交が厚かったようです。

### 閑谷学校での教育

君立は他にも、岡山藩士の斎藤一興(九畹)(宝暦8(1758)年〜文政6(1823)年)と親しくしていました。一興は勘定奉行・寺社奉行を経て、大目付になり、『黄薇古簡集』〔註4〕や『池田家履歴略記』〔註5〕などをまとめました。

君立は文化10(1813)年に閑谷学校の教授になりますが、君立を教授に推挙したのは斎藤一興でした。君立は長男の平太郎に名主役を譲り、単身で閑

谷に移住し教育と学校経営に専念しました。学校の名声が高まるとともに文人墨客が多く訪れるようになったため、学校の由緒と配置を描いた「閑谷学図」を作成し、応接の場として黄葉亭（君立と交流のあった頼山陽が撰）を建てました。

文化14（1817）年には藩主の嫡男池田斉輝の侍講と藩校国学の授読師に任ぜられましたが、文政2（1819）年、斉輝が死去し、君立は失意のあまり脱藩して京都に移りました。君立は兄登々庵の弟子たちと高林社という私塾を開き、そのかたわら『史鑑』の執筆に専念しました。『史鑑』は当時の常識的な人物論ではなく、君立による、民衆の立場に立った独特な史論を展開しています。君立は京都で『史鑑』を完成させましたが、印刷出版するには至らず、文政3（1820）年、備前に向かう途中で他界、享年53歳でした。

## 〔註〕

1 天神講…「講」は、宗教・経済活動の仲間の一呼称。「天神講」とは、和気郡北方村にある天神宮を拠点に、村民が学習することによって、互いの欠点や間違いを指摘し合って人情風俗の改善を図り、荒廃した村を復興することを目的に開かれた勉強会のこと

2 林述斎…明和5（1768）年～天保12（1841）年）江戸後期の儒者。昌平黌の幕府直轄化など、寛政の改革の教学行政に手腕を振っていました。

3 湯浅常山…（宝永5（1708）年～安永10（1781）年）。江戸中期の儒者、岡山藩士。江戸に出て服部南郭・太宰春台に学び、藩要職を歴任しました。

4 『黄薇古簡集』…備前・備中の岡山藩領の寺社や民家の所蔵の古文書を集録したもの

5 『池田家履略記』…岡山藩主池田家の履歴を

詳細に記した書

## 〔引用元〕

『吉永町史』

『閑谷学校史』

『武元登々庵の生涯と詩書』

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年 山陽新聞社

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年 角川学芸出版

## 武元 登々庵

たけもと とうとうあん  
生涯をかけた詩書研究



武元登々庵  
(吉永美術館蔵)

## 幼年の登々庵

武元登々庵（明和4（1767）年～文化15（1818）年）は、吉永町の漢詩人・書家・医者です。名は最初和五郎、後に周平と改めましたが、号の登々庵で良く知られています。明和4（1767）年、和気郡北方村（現・備前市吉永町岩崎）の名主武元和七郎の長男に生まれました。武元家は代々大庄屋〔註1〕や名主〔註2〕を勤めた名望家〔註3〕でした。幼いころから読書が好きで学問と詩書をよくしました。10歳の時に7歳の弟勇次郎（後の君立）と共に、父和七郎に連れられて、働村（現在の和気町吉田働）出身で当時閑谷学校の

教授を勤めていた有吉臓器（享保19（1734）年～寛政12（1800）年）に入門しました。和七郎は二人の子どもを学者にするためだけでなく、名望家になさわしい学問を身に付けさせる目的で閑谷学校に入学させました。彼ら二人は入学後、神童と呼ばれるほどの秀才ぶりを発揮し、特に兄の周平は書に優れ、弟の勇次郎は学問に秀でていました。

入学して2年後の安永7（1778）年、当時の学校奉行市浦清七郎の推薦により後楽園に招待され、藩主池田治政や重臣の前で周平は「武」の字を揮毫し、勇次郎は経書の講義を行い、神童ぶりに驚嘆されたといひます。

## 諸国遊学と蘭学への転向

閑谷学校在校中の天明2（1782）年、北方村の百姓有志で共同学習の場として天神講を作り、弟の君立（明和7（1770）年～文政3（1820）年）、従兄の明石順二（赤石順治（景誼）明和元（1764）年～文化12（1815）年）とともに会合を開きました。ここでは『経書』をひと月に3回順番に講義して、学びの中で人道を説くことにより、自然と風俗が良くなっていくことを期待しました。若干20歳程度の3人が経書を説くのは難しく、1年足らずで天神講は解体の危機に瀕しましたが、根気強く続けることで周囲の支援も受け、講の存続に繋がりました。

天明6（1786）年20歳の頃、江戸に遊学して柴野栗山（元文元（1736）年～文化4（1807）年）の門に入りましたが大病を患い一度帰宅し、農業も家業もできない体になりました。その後病状に適した諸国遍歴の途につき、大阪に出た際は筆売りで生計を立てながら故人が残した書画を手本に書道の研究に精進しました。その後も諸国を放浪し、寛政12



(1800)年帰宅した際、母親の花子が死去していたため3年間は喪に服し、北方村にとどまりました。その際に私塾を設け書道を教えました。評判が高く、その後享和3(1803)年37歳の春に、上道郡西大寺村(現岡山市東区西大寺)の名刹金陵山観音院で書の展示会を開き、参加した弟子は100人に及んだということです。

文化2(1805)年からは蘭学を志しました。当時、父の和七郎が病弱な登々庵のために、北方村の自宅に離れ座敷を作り、妻と協力して眼科医を営ませていました。登々庵は長崎遊歴の途中、広島の下に近い廿日市にしばらく滞在し、中井厚沢(安永4(1775)年〜天保3(1832)年)という蘭方医に師事しました。そこでオランダ語で書かれた医学書を目にして感激し、横文字も覚え、眼科医師の翻訳物をかなり筆写した、と君立に書き送ったほどでした。登々庵は、中井厚沢より「江戸の権勢や金銭面での支援を得たら長崎通詞から蘭学を教えてもらえ」と聞き、彼と共に江戸へ行きました。登々庵は、備前で蘭学社中を募り、備前蘭学の中心となることを志していました。文化4(1807)年の春、大阪に赴き稲村三伯(いなむらさんぱく)のもとオランダ語を学びました。翌年11月に長崎に遊学し、長崎の蘭学の学問的水準の高さ、そこに学ぶオランダ語志望の先輩の学識の深さに驚かされました。登々庵は、医業に役立つ蘭学ではなく、その道の第一人者になるための蘭学を目指していたため、蘭学の道の権威となることの難しい現実を突きつけられたのです。

## 古詩韻範の研究

その後、登々庵が目指したのは、古詩押韻の研究です。文化5(1808)年から同7(1810)年

の間長崎に滞在し、蘭学とは無縁な古詩韻範押韻の知識を得ました。これは、当時の日本でこれまでに知られていなかった作詩の方法であり、登々庵はこの発見を喜び、弟の君立にその喜びを書き送っています。文化7年に一度帰郷した登々庵は京都に赴き、そのまま定住しました。彼は門人を集めて書道を教え、眼科医も開業して生活の基礎を固め、質素儉約に努めながら古詩の研究を進めました。文化10(1813)年、自撰の詩集『行庵詩草』、同14(1817)年には古詩押韻の研究書『古詩韻範』を出版しました。

登々庵は、書道の研究、蘭学の研究、古詩押韻の研究など、その道の第一人者になることを目指して学問の遍歴を続け、仙台から長崎、京都、大阪など諸国を旅しました。地方に生まれ、病弱であった彼が書家・詩人として歴史に名を残すことができたのは、父和七郎・母花子・弟君立の愛情と理解があったからでもあります。その後登々庵は京都に居を定め、私塾を開いて多くの門人を育てました。その中には公卿や僧侶、町人、地主など様々な身分や職業の人がありました。ひとかどの書家を夢見た登々庵の念願は達せられたのではないのでしょうか。

## 〔註〕

1 大庄屋：江戸時代、幕府や藩が農村支配のために設置した村役人の一つ、代官や郡奉行と村々の名主・庄屋の中間に位置し、法令・廻状などの伝達や年貢の賦課・徴収などにあたり、訴訟・争論の調停機能もはたしました。有力な百姓のなかから選ばれ、給米や扶持を支給され、苗字帯刀を許される場合もありました。

2 名主：江戸時代の村方三役の一つ。村の長。領民

支配の末端機構として、村に賦課された年貢・諸役を領主に上納し、村の治安・秩序を維持しました。3 名望家：ある程度の財力や経済力があり、家柄・慈善的行為・政治的行政的指導力・活動力等により住民の信頼と尊敬を得、一定の地域の住民を代表できる「名誉と人望」を持つ人物

## 〔引用元〕

『吉永町史』

『閑谷学校史』

『武元登々庵の生涯と詩書』

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年 山陽新聞社

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年 角川学芸出版

たぶちや じんくろう  
田淵屋 甚九郎

日生の海運業のパイオニア  
北前船日本遺産認定で光



田淵屋甚九郎顕彰碑

「田淵屋甚九郎は、姓は末友、屋号を田淵屋といい、江戸初期から中期にかけて日生を根拠地に廻船屋を

営んでいた。なお、日生の人間にとっては、寺社の再建、さらには疫病流行時などの私財放出による援助などをしてくれた恩人でもある」。岡山県立図書館が運営する「デジタル岡山大百科」は、甚九郎についてこのように記しています。

日生には甚九郎に関するさまざまな伝承が伝わっています。

48隻の千石船を所有し、東南アジアまで出掛けて交易を繰り広げた、あるいはお金が埋まっている夢を見た漁師からその夢を買い、お金を掘り出して大金持ちになったなど、伝説上の人物として語られてきており、実在を裏付ける資料は乏しかったようです。

ところが、顕彰碑が出てきたことで、甚九郎は確かに実在したとわかったそうです。高さ1・01m、幅40cm、厚さ22cm。砂岩製の石碑には、底部の一部が剥落するものの、西念寺建立に尽力した甚九郎の事跡が明確に記されていました。

碑のわきに説明文が掲げられています。それによると、西念寺は浄土真宗の一道場に過ぎませんでした。甚九郎の10年に及ぶ粉骨碎身の努力で宝永5（1708）年、念願かない寺号を許されました。甚九郎は寺の維持費を永代寄進し、本堂などを建立、村の鎮守の八幡宮、春日神社などの修理も手掛けるなど地域に多大な貢献をなし、享保19（1734）年10月28日、七十余年の生涯を閉じました。早くも翌月には碑の撰文が書かれ、碑は建立されています。

碑文には甚九郎と北前船を結びつける記述はありません。ただ、甚九郎は五島列島出身との説があり、何度も同所に薪買いに出かけていた資料も残っているといえます。藩公認で密貿易を行っていたのではとの説も根強く残っています。甚九郎が北前船の航路を舞台に交易し、活躍していたことは確かであり、

日生の海運業のパイオニア、元祖だといわれます。

地元の太鼓グループが「日生甚九郎太鼓」の名前を名乗るのは、偉大な先人に捧げたオマージュでもあります。

昭和26（1951）年に近くの山中の竹やぶで発見された石碑は、西念寺の大修理が行われた昭和58（1983）年に本堂わきに移設され、市の文化財に指定されています。

### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## 津田 永忠

### 岡山藩政の基盤を固めた英傑



津田永忠像

### 池田家墓所と藩校の造営

津田永忠（寛永17（1640）年～宝永4（1707）年）は、岡山藩士です。岡山藩の郡代（註1）・藩政確立の中心的人物。幼名は又六・八大夫、通称は重二郎、のち佐源太、諱は永忠。岡山藩士・知行6百石津田左源太貞永の三男として生まれました。承応2（1653）年、14歳の時に岡山藩主池田光政に拝謁し、切米（註2）30俵4人扶持で見小姓に取り立てられます。その後、光政に認められ寛文4（1664）年に知行3百石・大横目となり、最高の藩政評議機関である評定所に列座しました。

寛文5（1665）年、光政の命により池田家墓所造営のために領内を巡検し、寛文7（1667）年に和意谷墓所造営の総奉行となり墓所を造営しました。また、その前年には熊沢蕃山の実弟である泉仲愛とともに学校奉行を命じられ、藩校である石山仮学館を設立しました。寛文8（1668）年に大横目を解かれ、郡中に手習所123か所を設立し、手習所・和意谷墓所・藩校の整備を担当しました。同年、東中山下に藩校国学の新築を命じられ、敷地内に学校奉行屋敷を賜りました。また、評定所への出座も認められ、光政による厚い信任がありました。

寛文10（1670）年には閑谷学校を設立し、同年和気郡友延新田（現備前市友延）に、井田（註3）制の地割を行い、これを上井田、貞享元（1684）年から元禄元（1688）年にかけてはさらに下井田を作り、これを学校田とすることにより閑谷学校の経済基盤を安定させました。

### 貧民救済からの藩政改革

寛文12（1672）年、藩主光政の隠退および長子綱政の襲封と同時に評定所出座・学校奉行の職を解かれ、和意谷墓所・閑谷学校・井田・郡中手習所・社倉米の管理に専念するよう命じられ、延宝元（1673）年には閑谷学校の東部へ屋敷を造営しました。

延宝3（1675）年、毎年の大洪水の結果大飢饉が発生し、貧民が続出しており、その救済のため永忠は手習所の閉鎖、手習所米による施粥を綱政に進言し、信任を得ました。延宝4（1676）年には藩財政再建の責任者として起用され、藩の再建案を作成し、これに基づいた藩政改革が翌年から始まりました。延宝6（1678）年に郡肝煎に任じられて郡



中を回って各村を視察し、郡奉行を指導しました。また藩財政問題に関連し、臨時的に評定所へ出座することが許されました。

## 数々の治水事業

延宝7(1679)年2月、藩営として初の開拓である上道郡倉田新田(現 岡山市中区倉田・倉富・倉益)約300haを開墾し、その用水路として吉井川から水を引き、旭川に合流する倉安川の開発を行いました。また同年8月和氣郡梶島・鴻島・鹿久居島に藩営の馬牧〔註4〕を取り立て、新田・馬牧ともに社倉米〔註5〕を充当しました。

延宝8(1680)年には長年の功勞により、評定所列座となりました。天和2(1682)年には郡代に任じられ、同時に郡政を改革し、承応3(1654)年以来担当の郡に在住した郡奉行・代官を城下の役宅に集住させ、郡会所を設置して統一ある郡政を展開しました。同時に郡奉行以下の諸役人、肝煎以下の村役人や百姓を視察・監督させるため、侍身分の郡目付、百姓身分の作奉行を置き、きめ細かな郡政を始めました。

天和3(1683)年、邑久郡(現 岡山市東区西幸西・東幸西・北幸田・水門町・南水門町・東幸崎)約560haの開発を進言し翌年9月に完成、貞享3(1686)年、岡山城下を旭川の洪水から守るために百間川を開削、元禄4(1691)年には後楽園の普請に着手し、翌年に完成させています。

元禄5(1692)年9月には上道郡沖新田(現 岡山市中区江崎・江並・藤崎・桑野・沖元、東区光津・政津・君津・升田・豊田・九幡・金岡東町三丁目)約1918町歩(1902ha)の開発を命じられ、総工費約965貫、人夫百万人余り(延べ)を動員し、

まず長さ6千518間(約12km)に及ぶ潮止め堤防を築き、次いで付帯工事が推し進められ、翌年6月末に竣工しました。こういった大規模な新田開発によって年貢増収、土地不足の課題を解決しました。この業績が認められ、元禄6(1693)年に番頭に昇進し、藩主である綱政の命により通称重二郎を佐源太に戒名しました。続いて、元禄8(1695)年には牛窓湊の石波止の築造、翌年には備前一宮の造営、同11(1698)年には和氣郡大多府島(現 備前市日生町)に元禄防波堤を築きました。同年、綱政の命により池田家の菩提寺護国山曹源寺を上道郡円山村(現 岡山市中区円山)に造営し、後の正覚谷に墓所を作りました。元禄14(1701)年には閑谷学校講堂を改築し、学校を完成させました。

元禄16(1703)年に郡代の職を解かれて閑谷に隠居し、閑谷学校、和意谷墓所、井田、社倉米の御用を担当することになりました。宝永4年(1707)岡山城下で死去、享年68歳。和氣郡吉田村(現 和氣郡和氣町吉田) 奴久谷の墓地に葬られています。

## 〔註〕

1 郡代…領主に代わって徴税・司法・軍事等の職務を郡という広い単位で担当した地方行政官

2 切米…蔵米とも。江戸時代、幕府・諸藩が家臣に俸禄として支給した米

3 井田…古代中国の周の時代に行われたと考えられてきた理想的田制。9百畝の田を9等分し、8区画の田を農家1家あたり百畝の耕地が私田として平等に与えられ、残る1区画を公田8農家が共同耕作します。

4 馬牧…馬を放牧して飼養・育成する施設や土地

5 社倉米…飢饉に備えた米

## 〔引用元〕

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年 山陽新聞社

『吉永町史 通史編Ⅱ』

平成18年 吉永町史刊行委員会

『企画展 アートする池田家』

平成26年 備前市歴史民俗資料館

『閑谷学校史』

『岡山県史』

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年 角川学芸出版

## 中司 通明

なかつかさ

みちあき

「漁社総裁」として手腕を発揮した

日生村最後の名主

日生村の長は、代々中司家(日生氏)が世襲していました。第12世で最後の名主となったのが中司通明(天保元(1830)年～明治31(1898)年)といわれ、父惣兵衛の代から栄華の極みを迎え、村民から崇拜されていました。

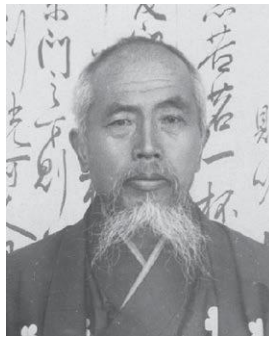
明治10(1877)年からは岡山県官吏として活躍し、治山治水・殖産興業、特に水産業の分野で「漁社総裁」としてその手腕を発揮しました。通明は、日生村の漁民が他県で引き起こした事件の解決や朝鮮漁業への強力な支援、また、もずく・昆布海苔・煎海鼠(いりこ＝干しなまこ)・鰯などの日生の産物を広く国内に紹介するなどとして、後世に残る日生

の漁業の基礎をつくりました。

## 西 薇山 （本名 西 毅一）

### 閑谷学校再興の立役者 『書斎、顕彰碑にし』のばれる師弟愛

国の特別史跡旧閑谷学校。石堀に並行する洋池手前の駐車場から西へ少し上る華甲斎の跡からは、木の間隠れに国宝の講堂など学校の全容が一望できます。



西 薇山

華甲とは数え年61歳のこと。明治期、閑谷学校を再興した西薇山（天保14（1843）年～明治37（1904）年）の還暦を祝って明治36（1903）年11月、門人たちが西の居宅、静溪書院の傍に建てた書斎が華甲斎です。ここを使ったのは、ほんのわずかな期間で、西は翌年3月、自死します。

閑谷学校は岡山藩主池田光政が寛文10（1670）年、諸藩に先駆けて、庶民教育のための学校を建てるよう学校奉行津田永忠に命じたことに始まり、現在の県立和気閑谷高等学校までつながる歴史は、実に350年を超えます。ですが、明治維新を迎えると、相次いで存続の危機に見舞われました。明治3（1870）年、岡山学校（藩校）に併合されて閉鎖。いったんは同6（1873）年、備前松山藩の財政を立て直した陽明学者山田方谷を迎え、閑谷精舎としてよみ

がえったものの、古希を過ぎた方谷の病状が悪化し、同10（1877）年再び閉校の憂き目にあいます。

この時、再興の立役者になったのが西薇山です。明治14（1881）年、閑谷保善会を設立して募金活動に乗り出し、同17（1884）年8月、閑谷巒として開学を果たします。妻と二人の娘を伴い、一家を挙げて岡山から移住。以来、亡くなるまでの20年間、教頭、初代巒長、最後は私立閑谷中学校の校長として、再興に身を捧げるようになりました。

華甲斎から北に下った閑谷学校資料館の玄関口には、大正14（1925）年に門弟たちによって「薇山西先生碑」が建てられています。かつて閑谷巒があった場所です。台石を含めると3mを超す巨大な顕彰碑は華甲斎とあわせ、西がいかに教え子たちに慕われ、敬われていたかを如実に物語ります。

閑谷巒の校風は、西の風格を映して、礼儀正しく、師弟の間の情が極めてこまやかだった、と言われていいます。とくに「勤儉と正直と信実」―近江聖人中江藤樹の教えを「三つ宝」と称えて大切にしました。藤樹は校祖光政が最も尊敬した儒者です。

西の突然の死の理由については明らかではありませんが、近代教育制度が整えられていく中で、学校経営をめぐる問題が背景にあったとみられています。死の前年、閑谷巒は私立閑谷中学校と改められ、近代学校体系の中に組み込まれました。

岡山藩の下級武士の家に生まれ、森田節斎、西後村に学んで漢学で身を立て、岡山県官吏に登用されてからは学事改革や地租改正などに従事、何度も中国に渡るなど世界に目を開き、国会開設を求める自由民権運動、困窮する土族の授産活動にも携わり、衆議院議員を2期務めるなど多岐にわたって活躍した西。後半生は清貧のうちに閑谷で過ごし、郷学の

伝統を絶やさぬよう、献身的な努力を重ねました。

閑谷学校から閑谷隧道を抜けて吉永側に下った西谷墓地に葬られた墓石には「薇山西毅一之墓」と刻まれているのみ。墓が並び建つ妻熊子とともに静かに眠っています。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## 藤原 啓 （本名 藤原 敬二）



藤原 啓

藤原啓（明治32（1899）年～昭和58（1983）年）は、現在の備前市穂浪に生まれました。実家は農業であった上、もともと作家志望であり、中年にいたるまで焼きものとは無縁でした。備前焼を手がけはじめたのは昭和14（1939）年の春、実に40歳の時からです。

彼は少年時代から文学志望であり、俳句や小説づくりに熱中しました。同郷出身の文学者正宗白鳥に對するあこがれや賀川豊彦が出版した「一粒の麦」



に刺激されて、ついに19歳の時、代用教員の職を投げうって上京しました。

東京での藤原啓の12年間は波乱に富んでおり、文学を学ぶというより、人生を知ろうとする思想の放浪ともいべき体験の連続でした。文学青年として若い詩人たちのグループとの交遊、博文館における編集の仕事を通じて知りあった多くの文壇の人々との交流をはじめ、絵や音楽も学ぶなど、思いついたらすぐ実践するというバイタリティを見せています。しかし、文学への道はついに開かれないまま、昭和12(1937)年38歳の藤原敬二は東京を去ります。

郷里に戻ると、友人で正宗白鳥の弟でもある正宗敦夫のすすめで備前焼を始めますが、まだ備前焼など売れない当時地方新聞に小説や随筆を書いている生活を支えました。特殊な勘と技術を要する備前焼だけにいくつもの障害に出会いましたが、幸いにも金重陶陽が親切に指導してくれ、互いに師弟というよりも、ともに土を愛し、酒を愛する人生の友として備前焼の名声をもりあげてきました。後にともに人間国宝となったこの二人の作風はまさに対照的。陶陽の作品がきびしく精悍なのに対し、藤原啓の作品はおおらかで素朴です。それは、藤原啓の人柄をそのまま映しています。いつもかざらず、人間がじかに出ている所が広く愛される所謂でしょう。

昭和45(1970)年 国指定重要無形文化財「備前焼」保持者(人間国宝)に認定

昭和46(1971)年 勲四等旭日章受章

昭和51(1976)年 備前市名誉市民

昭和58(1983)年 没、従五位、勲三等瑞宝章受章

## 藤原 審爾 ふじわら しんじ

### 戦後の新進作家



藤原審爾

藤原審爾(大正10(1921)年～昭和59(1984)年)は、東京で生まれました。3歳で母と生別、6歳で父と死別し、父の郷里である和気郡片上町(現・備前市東片上)の家で幼少時代を祖母とともに過ごしました。『ひとりはいまからず』(藤原審爾 1985 毎日新聞出版)に「その高い石垣の上の屋敷には、玄関二つと勝手口や使用人の出入りする入り口が三つあり」と綴るように格式ある庄屋の家系でした。片上尋常高等小学校(現・備前市立片上小学校)、岡山県立閑谷中学校(現・岡山県立和気閑谷高等学校)を卒業後青山学院高等商学院(青山学院大学の前身校)に進みますが、肺結核で倒れ、中退しています。

療養生活が続けながら作家外村繁に師事し、文学活動を展開します。玉野市にあった同人誌『曙』の権利を譲ってもらい発行し、敗戦後、『文学祭』と改題し、これに発表した「煉獄の曲」が文壇で認められます。昭和22(1947)年岡山県北の奥津温泉を背景にした出世作「秋津温泉」を『人間』に発表。人の愛の哀しさを清冽な叙情で描いて好評を博し文壇での評価を得、昭和23(1948)年直木賞候補となり、のち映画化されました。ほか『泥だらけの純情』『赤い殺意』など映画化された作品も多く、そ

の中には日本映画史に重要な影響を与えた作品も少なくありません。昭和27(1952)年には、「罪な女」などの3作品で第27回直木賞を受賞しています。

長編から短編まで多様なジャンルの作品を世に送り出しました。

私は、よくいわれるような純文学とか大衆小説とかの分類を、さして重要視いたしません。小説は、読者に応じて書くべきであると思っていますので、大方は、雑誌の読者層にむかっただけでいいと思います。それゆえ、その純文学的なものもあれば、中間小説的なものも、また大衆小説風なものもあります。

藤原審爾1957『藤原審爾作品集』森脇文庫

題材やテーマによって執筆方法、スタイルが大衆小説的になるか純文学風になるかの相違があるだけにすぎず、藤原審爾のなかには大衆小説と中間小説と純文学の差別がありません。そして、ミステリー、サスペンス、寅さん映画の原点にもなったユーモア、性風俗、動物、妖怪、任侠といったエンターテインメント作品や子供、女性、教師などの社会問題を扱った社会教養小説など幅広い分野の作品を書き分け、「小説名人」の異名を取りました。

趣味も多岐にわたっており、陶芸、釣り、ビリヤードなどの他、野球好きが高じ「藤原組」を作り昭和44(1969)年には東京代表として長崎国体に出場したばかりか、巨人軍入りの投手もいました。麻雀は、朝から晩まで文学仲間や編集者を集め没頭し、玄人に近いレベルまで到達していたといえます。焼き物への関心も高く、藤原家の門の前には古備前の大甕があり、玄関から庭まで大小の壺が置かれており、多くの焼き物に囲まれていました。

晩年、ライフワークとして大作「宮本武蔵」の執筆を進めていました。藤原家の書斎の一角に、格子戸で仕切られた四畳半の和室があり、ここには宮本武蔵の略年表を張りめぐらせ、武蔵関係の全資料が集められていました。しかし、審爾は宮本武蔵の執筆を開始した頃はすでに体調が悪く、歩くのも辛い状態であったといえます。完成することなく、志なかばにして昭和59(1984)年に肝臓癌で入院し、同年63歳で逝去しました。片上の土になりたいという生前の言葉通り、墓地は東片上にあります。

#### 〔引用元〕

藤原審爾1985『ひとりほうまからず』

毎日新聞出版

藤原審爾1985『遺す言葉』

新潮社

藤原審爾1957『藤原審爾作品集』

森脇文庫

柳橋史1997『赤い殺意／罪な女』

人と作品 講談社大衆文学館

小松伸六1978『おそい愛』

解説 講談社

## 藤原 雄

藤原雄(昭和7(1932)年〜平成13(2001)年)

は、その後に人間国宝となる備前焼作家・藤原啓の長男として、現在の備前市穂浪に生まれました。父がそうであったように文学や音楽に熱中するといった多感な青年時代を過ごし昭和30(1955)年に大学を卒業後一旦は出版社に就職しますが、やがて父に師事し、備前焼の世界に入り、平成8(1996)年に人間国宝となりました。円熟しているが自由。角々しくない優しさ、自己主張ではな

くて、観る方が何かをその中から感じとることができる要素。彼の作品は彼自身に内包される感性と同様、様々に評されます。「そこにあたたかさとか、やさしさとか、強さとか、豪放さとか、そういうものを想像させる焼物。…それがあつことと精神的にあたたかみを感じるような焼物。そういうものをつくらなければいけない」それが陶芸家の使命である、と彼は言っています。



藤原 雄

彼にハンディがあつたことは意外に知られていません。右目0・03、左目はまったく見えないのです。そんな雄に先見性ある道筋をつけてくれた人は父です。無理だと言われた普通学校も東京の大学への進学も断固として薦めたのです。その決断が、「人の愛情を普通人の3倍にも5倍にも感じられる反面、普通のことの3倍も5倍も腹の立つ」強い感受性と正義感を育てました。中学・高校では新聞部や文学部の部長を務め、文学や音楽に熱中し傾倒しました。大学を卒業後、東京のみず書房という出版社で雑誌記者をしていた雄に「備前へ帰って備前の土になれ」と言ってくれたのは小山富士夫。彼の陶芸の美学の師です。父の友人であり陶芸の哲学の師には、北大路魯山人がいます。雄が形に拘って作っていた器を見て、魯山人はまだやわらかい口のところをひよいとつまんでみせました。「粹」を学んだ

瞬間でした。社会へ出てからは、川喜多半泥子、藤本能道、田村耕一や裏千家家元の千宗室匠他、女優、TVプロデューサー、詩人そして自ら認める食通であることから各国のシェフ等各界の人々とも親交を暖め、その美学を深めるのです。各国で個展を開き、棟方志功と一緒にたつたダートマス大学の客員教授時代には焼物の愛し方を教えました。メトロポリタン、ブルックリン他アメリカの美術館にも作品は展示され、大英博物館にも入ることになります。自らの焼物観を彼はこう語ります。

「古いと言われても、伝統的すぎると言われても、時代の推移に安易に迎合するのではなくて、時代の変化は感じながらも、しかし、普遍的な美しさと言いか、一万年前も一兆年後も変わらない価値をめざしていこう」と。

平成8(1996)年 国指定重要無形文化財「備前焼」保持者(人間国宝)に認定  
平成18(2006)年 備前市名誉市民

## 正宗 敦夫

国内屈指の「正宗文庫」創設者  
〜歌人、出版人、国文学者…多彩に活躍〜



正宗敦夫



片上湾沿いに走る道路から穂浪の難田西集落に入って坂道を上りきった高台に、その建物はあります。

鉄筋コンクリート2階建て。赤い鉄扉のわきに掲げられた緑青のプレートには「正宗文庫」の文字が浮き上がります。昭和11(1936)年に建てられたこの堅牢な書庫には、古典籍を中心に約7千点・2万冊、個人のものとしては質量ともに国内屈指の蔵書が収められています。生まれ故郷の穂浪を生涯離れず、歌人、出版人、国文学者として多彩な活躍を見せた正宗敦夫(明治14(1881)年～昭和33(1958)年)が自らの貴重な蔵書の保管、活用のために自宅近くに設けた『宝の蔵』です。

兄の文化勲章受章の文学者正宗白鳥(忠夫)は別格としても、弟の洋画家得三郎と比べても、敦夫の一般の知名度は劣るようです。正宗文庫についても白鳥の著作を集めた施設と勘違いして訪ねてくる人もいるということです。

ですが、専門家筋によると、敦夫と正宗文庫に対する評価は極めて高いものがあります。人間文化研究機構国文学研究資料館(東京)は、平成14(2002)年から定期的に同文庫の蔵書の文献調査とデジタル撮影を進めています。

正宗敦夫は明治14(1881)年、和気郡穂浪村(現備前市穂浪)の地主・網元であった正宗家の次男として生まれました。7男3女の10人きょうだい。敦夫以外は次々に古里を巣立っていく中で、ひとり地元の協和高等小学校(現市立片上小学校)を卒業し、すぐ、家業を継ぐ役割を担いました。

正宗家は代々、文芸を愛好する家系で、敦夫も舟で岡山に通って仕入れた商品を穂浪で売りさばく雑貨屋業のかたわら、短歌の創作に取り組みました。10代の半ばに、岡山第三高等学校医学部(岡山大学

医学部の前身)眼科教授だった歌人の井上通泰(みちやす・慶応2(1866)年～昭和16(1941)年)に巡り合ったことが敦夫の生涯を方向づけました。井上は民俗学者柳田国男、日本画家松岡映丘の実兄です。歌人、歌学者として、のちに御歌所寄人にもなるなど幅広く活躍しました。岡山にいたのは7年間でしたが、吉備史談会を起こすなど岡山の文学、郷土史研究にも大きく貢献した人物です。

敦夫は歌人としては歌集『鶏肋(けいろく)』一冊を残したのみですが、自宅に印刷機を据え付け、井上に寄り添った出版活動を精力的に展開しました。井上門下の短歌結社のための月刊誌『国歌(くにうた)』、井上の万葉集、金葉和歌集に関する講義録などを次々刊行。出版事業はのちに廉価な文庫本スタイルの『日本古典全集』(全266冊)、岡山藩の儒学者だった熊沢蕃山の『蕃山全集』(全6冊)といった労作へ結実します。

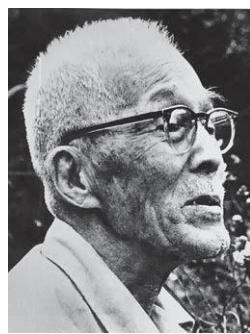
さらに、国文学者としての仕事として敦夫が独力で20年以上の歳月をかけて完成させた『万葉集総索引』は、今なお万葉集研究に必須とされます。晩年はノートルダム清心女子大学国文学科の教授に招かれ、76歳で亡くなるまでの6年余り、教鞭を取りました。備前焼研究家の桂又三郎を一時期、自宅に住まわせて支援するなど、備前焼発展に果たした役割も見逃せません。

『宝の蔵』には敦夫の全人生が収められています。創設から87年。今あらためて同文庫に光が当たり、「地域の宝」として、その価値が見直されています。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## まさむね ときさぶろう 正宗 得三郎 洋画と日本画を描く



正宗得三郎

### 得三郎と画家たちの出会い

岡山県和気郡穂浪村(現・備前市穂浪)に生まれた正宗得三郎(雅号・薇洲(びしゅう)、明治16(1883)年～昭和37(1962)年)は、小説家・劇作家・文芸評論家の正宗白鳥、国文学者・歌人の正宗敦夫を兄に持つ洋画家です。

得三郎は明治31(1898)年15歳の時、協和高等小学校(現・備前市立片上小学校)を卒業し、明治35(1902)年19歳の時に上京して、寺崎広業(註1)の開いた天籟画塾で日本画を学びました。やがて洋画を志し、東京美術学校(現・東京藝術大学)西洋画科に入学し、同級生には辻永・森田恒友・山本鼎・村上為俊・児島虎次郎らがいました。明治36(1903)年、先輩の青木繁(註2)の画風に感銘を受け、坂本繁二郎・熊谷守一・森田恒友・村上為俊・和田三造らと共に青木の周囲に集いました。

明治37(1904)年21歳の時、輻重輪卒(註3)として日露戦争に出征しました。兄で国文学者の正宗敦夫(明治14(1881)年～昭和33(1958)年)の当時の書簡に、得三郎出征の動静が記されています。その中で、動員令は明治37(1904)年4月16日、戦地行の汽車が岡山駅を発車したのは5月下旬、

そのまま大孤山、遼陽方面に出動、やがて奉天攻略に参加したとあります。弟思いの敦夫は、足にアカギレができやすい得三郎を案じて、靴下等の防寒具を戦地へ届けたいと手を尽くした様子が記述されています。得三郎は奉天の戦には無事でしたが、腸チフスにかかり帰還しました。

その後再び東京美術学校に戻り、明治40（1907）年に卒業。以降は白馬会〔註4〕・文展〔註5〕などに作品を出品し、明治42（1909）年第3回文展に出品した『白壁』で初入選します。このころ印象派に共鳴し、明治43（1910）年高村光太郎〔註6〕が経営する琅玕堂で初個展を開き、同期の山本鼎・森田恒友らと洋画界で活躍しました。

### ヨーロッパでの学び

大正3（1914）年、石井柏亭らと二科会〔註7〕を創立し、同年フランスに渡りました。フランスではアンリ＝マティスに師事し、新しい画風を身につけて大正5（1916）年、第1次世界大戦のため帰国しました。

同年第3回二科展に滞欧作36点を特別陳列し、参考作品としてマティスの作品が出品されました。これは日本で初めて展示されたマティス作品であり、当時は話題になりました。得三郎は印象派や明快な画風が注目され、同年二科会の会員になりました。

大正10（1921）年～13（1924）年の間、再渡欧してパリで制作に勤しみました。帰国後はさらに画風に変化を見せ、それまでの印象主義から後期印象派に接近し、目に映る色彩より、心で感じる色彩を描くように、豊かな色彩を駆使した斬新な画風は、当時の洋画壇に新風をもたらしました。以降は毎年写生旅行に出かけ、精力的に作品を制作し、発表し

ていきました。

### 富岡鉄斎の研究

また、以前から傾倒していた富岡鉄斎〔註8〕の研究にも打ち込み、昭和17（1942）年『富岡鉄斎』を刊行しています。また、自身の画集や随筆集も刊行しました。得三郎が創設に関わり、会員となった二科会は昭和19（1944）年に戦争のため一時解散、昭和20（1945）年、東京のアトリエが戦災に遭い多くの作品を失い、同年長野県下伊那に疎開し終戦を迎えました。戦後の昭和22（1947）年に中川紀元・熊谷守一・宮本三郎らと二紀会を創立し、晩年は一時闘病生活に入りますが、奇跡的に回復し、その後は作品制作と鉄斎の研究に打ち込みました。

得三郎の祖父直胤は画家としても名をなしていますが、天性の才能が再度の渡欧によってより洗練され、美術批評や本の装丁、挿絵などにも幅広く活躍しました。詩歌人などの交友関係も広く、与謝野鉄幹・晶子夫妻の雑誌『第二明星』にはヨーロッパからたびたび文章を寄せています。

得三郎は、生涯画筆をもって画業に終始し、昭和37（1962）年3月14日、79歳で逝去しました。

### 〔註〕

1 寺崎広業：慶応2（1866）年～大正8（1919）年。日本画家。本名広業、別号秀斎・宗山。秋田県出身。明治24（1891）年岡倉天心らと日本青年絵画協会に参加。東京美術学校助教授となりますが同校騒動で退職。日本美術院に参加。1901年東京美術学校に復帰しました。帝室技芸員。

2 青木繁：明治15（1882）年～44（1911）年。洋画家。福岡県出身。東京美術学校卒。在学

中の明治36（1903）年『黄泉比良坂』ほかで白馬会賞受賞。『海の幸』『わだつみのいろこの宮』で名を高めました。1907年以後、九州を放浪。明治時代の浪漫的風潮を代表しました。

3 輻重輪卒：旧陸軍で、輻重兵の監督下に輻重の運搬に従事する兵卒。「赤ベタ」と呼ばれ、階級票には星がなく、二等兵の下位とされました。のち、輻重特務兵と改称。

4 白馬会：洋画の美術団体。黒田清輝・久米桂一郎らにより明治29（1896）年設立。創立会員はほかに岡田三郎助・和田英作・藤島武二など。旧来の明治美術会系（旧派）に対し、印象派風の清新な作風から新派・紫派とも称され、画壇の中核勢力となりました。1911年解散。翌年その後身として中沢弘光らは光風会を創立しました。

5 文展：文部省美術展覧会の略。文部省が主催した美術展とその運営組織。日本画・洋画・彫刻の三部を設置し、明治40（1907）年10月より毎年秋に開催。大正8（1919）年に廃止、帝展（帝国美術展覧会）に継承されました。昭和12（1937）年再改組により復活し（新文展）、明治44（1911）年まで開催。敗戦により廃止されましたが、官展の伝統は戦後日展（日本美術展覧会）に受け継がれました。

6 高村光太郎：明治16（1883）年～昭和31（1956）年。詩人・彫刻家。東京都出身。東京美術学校卒。父は光雲。欧米に遊学し、ロダンに傾倒、帰国後詩作を始め、文芸雑誌『スバル』に拠り享楽主義詩人として活躍しました。やがて『白樺』の同人と接近して理想主義的傾向に転じ、独自の力強い男性的詩風を完成させました。また、神田淡路町に日本で最初の画廊である琅玕堂を経営し



ました。

7 二科会：洋画の美術団体。文展洋画部の旧派・新派を分けて展示する二科制問題に端を発し、大正3（1914）年石井柏亭らが文展を脱退して創立しました。革新的な在野団体を掲げ、新しい傾向の洋画家の活動場所となりました。

8 富岡鉄斎：天保7（1836）年～大正13（1924）年。国学者・日本画家。本名百鍊。京都府出身。国学・儒学・仏教を修め、気品の高い文人画を完成、南宗画派の中心的存在となりました。帝室技芸員（明治23年10月設置。皇室の美術奨励に基づく荣誉職。）・帝国美術院会員。

#### 〔引用元〕

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年 山陽新聞社  
『階上階下すべて書にして 正宗敦夫の世界』

平成元年 吉崎志保子

『和気郡史 通史編 下巻Ⅱ』和気郡史編纂委員会

平成14年 和気郡史刊行会

『ふる里』正宗得三郎 昭和18年 人文書院

『史料 画家正宗得三郎の生涯』

平成8年 村山鎮雄

『飯田市美術博物館所蔵品図録「正宗得三郎」』

平成24年 飯田市美術博物館

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年 角川学芸出版

まさむね はくちよう

正宗 白鳥（本名 正宗 忠夫）

自然主義文学者の代表



正宗白鳥

#### 白鳥の幼少期

正宗白鳥（明治12（1879）年～昭和37（1962）年）は、明治25（1892）年、13歳の時閑谷黌に入学し、漢学・英語・数学などを学びました。また、「国民之友」（註1）などの影響も受け、キリスト教を知ります。聖書を買って読みましたがよく分からなかったもので、明治27（1894）年、弟の敦夫とともに香登のキリスト教講義所を訪れ、その伝道師から教えを受けることになりました。聖書は、幼少より小説や物語が好きな白鳥にとって面白く、伝道師の紹介で岡山孤児院の創設者で慈善事業家の石井十次（慶応元（1865）年～大正3（1914）年）から聖書の講義を聞くようになりました。その中でキリスト教の教えを理解するようになり、次第に東京へ行き、有名な牧師やキリスト教学者の話を聞いて宗教知識を得たいと熱望するようになりました。

#### 白鳥とキリスト教

明治29（1896）年、17歳の時に上京し、東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学しました。牧師であり日本基督教教会の指導者である植村正久（安政

4（1858）年～大正14（1925）年）や、宗教家・評論家でありキリスト教徒である内村鑑三（文久元（1861）年～昭和5（1930）年）の教えを受けて、間もなく受洗しました。数年後に棄教しますが、香登教会から始まり、当時第一線のキリスト教伝道者による教えを受けたことは、思想に目覚める青年期の白鳥に大きな影響を与えたと言えます。

明治34（1901）年卒業後は早稲田大学出版部に入り、明治36（1903）年には読売新聞社に入社しています。明治37（1904）年、処女作『寂寞』によって文壇デビューし、明治41（1908）年、『何処へ』によって自然主義文学（註2）の代表的作家として知られるようになりました。以後、明治・大正・昭和と絶えることなく創作や批評など執筆活動を続け、昭和37（1962）年に亡くなるまで、半世紀以上にわたって常に第一線の作家でした。昭和25（1950）年に文化勲章を受章しています。

白鳥は小説家であるとともに、優れた評論家でもあり、合理的で鋭い視点で事象を批評しています。白鳥は生涯故郷を嫌い、文章の中で良いように書かなかったと言われていますが、小説「入り江のほとり」で、穂浪の村の風物をクールなタッチで描写しています。他にも「今年の秋」や「リー兄さん」で故郷や家族をモデルにした作品を残しており、冷静でそっけない文体の中に白鳥自身の面白さが読み取れ、人気作家としての地位を確固たるものにしました。

#### 〔註〕

1 「国民之友」：明治前期の総合雑誌。明治20（1887）年、徳富蘇峰が民友社を起こし、平民主義（社会や生産の担い手は平民であるという主張）を掲げて創刊しました。

## 2 自然主義文学：19世紀後半にフランスに起こった文学思想。フローベール、ゾラが中心。自然科学に基づく実証主義を文学に導入しました。日本では、明治30年代に小杉天外・永井荷風らが遺伝や環境で人間をとらえるゾラの方法を移入しました。善悪美醜をこえた自然として人間を客観的に観察する態度は自然を拡充しようとする浪漫主義と結びつき、自然主義文学の基本となりました。島崎藤村の『破戒』、田山花袋『蒲団』によってその方向性が定まり、徳田秋声・島崎抱月・正宗白鳥らの活躍で文壇の主流となりました。特徴は、「因習による反抗」、「社会矛盾の暴露」ですが、社会矛盾の克服には至らず、次第に傍観的な客観描写や自己告白となり、大正期には衰退しました。近代リアリズム生成や個性解放に果たした役割は大きく、ここから生じた私小説は以後の近代小説の一典型となりました。

## 〔引用元〕

『和気郡史 通史編 下巻Ⅱ』

平成14年 和気郡史編纂委員会

『正宗敦夫 階上階下すべて書にして』

吉崎志保子

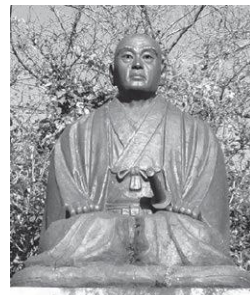
『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年、山陽新聞社

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年、角川学芸出版

万代まんだい 常閑じょうかん日本売薬の祖  
富山に返魂丹伝授した第11代

第11代万代常閑像

国指定重要文化財の本堂、三重塔を背に、第11代万代常閑（明暦3（1657）年～正徳2（1712）年の陶像が真言宗の古刹真光寺（西片上）前に建ったのは昭和35年のことです。作者は細工物を得意とした備前焼の県重要無形文化財保持者伊勢崎陽山（明治35（1902）年～昭和36（1961）年）。現在の人間国宝淳氏の父です。

もともとは銅像で片上小学校の校庭にありましたが、第二次世界大戦中に台座だけを残して供出されたため備前焼で復活させ、台座と一緒にここに移動したのだということです。

端然と正座する常閑像の視線の先には片上の家並みが広がり、万代家の旧居跡もその中にあります。海陸の往来がにぎやかなこの地に万代家が居を定めたのは、第13代の明和4（1767）年の時です。和気郡益原村（現和気町益原）から移り住みました。

万代家は代々医を家業とし、当主は常閑を名乗りました。祖先は室町將軍足利氏に仕えて和泉国万代（もず）村（現大阪府堺市）を領しており、堺港に漂着した明国船の乗組員から妙薬の「延寿返魂丹（えんじゅはんごんたん）」の製法を教わり、以後一

子相伝で伝えたということです。応永年間（1394年～1428年）、第3代の時に戦乱に巻き込まれ、縁故を頼って益原村に移住。この時から「もず」を「まんだい」と読み替え、名も「常閑」と改めたのだということです。

歴代の常閑のうち、とりわけ後世に名を残したのは「日本売薬の祖」と形容される第11代常閑です。越中富山へ「延寿返魂丹」を伝え、富山の売薬の歴史へ大きな影響を与えた人物として知られます。以下の話が伝わっています。富山藩前田家の2代藩主正甫（まさとし）の家臣が旅先で腹痛を起こした際、常閑からもらった返魂丹で治まりました。正甫は自らの腹痛時にも返魂丹の効き目が顕著であったことから、藩内の薬種屋に製造、販売させ、広く諸国へ売り広めるように命じました。これが越中の「返魂丹」、売薬の始まりということです。

富山市の妙国寺では毎年6月5日、万代常閑報恩祭（常閑祭）を開催。それは「とやまの年中行事百選」（富山県教委生涯学習・文化財室編集・発行）にも選ばれています。第11代は和気地方を襲った疫病の治療や藩工事での医療活動などの功績で元禄17（1704）年、岡山城下に屋敷を与えられ、「延寿返魂丹」の看板も下賜され、郡医に任命されるなどしていますが、今では岡山よりも富山の方で有名であるようです。

旧山陽道沿いの万代家旧居跡には、かつてベランダ付き総2階、白亜の洋風建築の医院が建てられ目を引いていましたが、平成19（2007）年12月、第21代が死去したのち、医院も住居も取り壊されました。250年以上にわたって地域の人々の健康を支えたこの地は駐車場に姿を変え、わずかにナマコ壁の蔵が1棟残るだけです。



万代家は14代までは漢方医学、15代から17代がオランダと漢方の折衷医学、18代からは西洋医学というふうな日本の医療の歴史とともに歩みながら、町医者として地域医療によく尽くした家系であり、地元の人々は先生から『お金がなくても、悪いところがあれば私が診てあげる』と言われていたということです。

#### 〔引用元〕

広報びぜん シリーズ「ゆかりの人、ゆかりの地」

## 万波 忠治

まんみなみ

ちゅうじ



万波忠治 (吉永町史)

万波忠治(嘉永2(1849)年〜大正9(1920)年)は、和気郡北方村(現 備前市吉永町岩崎)出身の政治家・実業家です。父は明石多平ですが、和気郡南方村(現 備前市吉永町南方)の万波家の養子になったということです。

明治22(1889)年に市町村制が施行され、福満村・金谷村・南方村・吉永中村・三股村・岩崎村の六村が合併して英保村が成立すると、万波忠治は英保村の村長に就任し、明治32(1899)年までの10年間村政を執り行いました。村長として村役場の新築、道路や橋梁、河川の整備や灌漑事業の実施、防

疫事務の創始など、様々な事業に精力的に取り組む、公共事業や寺社への寄附を度々行うなど、村の発展に大いに貢献したことが吉永町岩崎に建てられた顕彰碑(白木豊撰文 昭和6(1931)年建立)に記されています。村長職の傍ら、閑谷黌の教職員として『増訂及門録』(学校名簿)や校友会誌『閑谷』の編集にも携わりました。

明治32年に郡制改正が交付されると、万波忠治は和気郡郡議会議員第一回選挙に出馬し当選しました。明治44(1911)年には岡山県議会議員に当選し一期を勤め、翌年の大正元(1912)年には第四代和気郡郡議会議長に就任しました。

大正6(1917)年に岡山県によって「済世顧問設置規程」が公布され、県下市町村の貧困対策が打ち出されると、万波忠治は英保村の済世顧問を委嘱されその任に当たりました。

実業家としては、明治27(1894)年に三石耐火煉瓦株式会社の専務取締役就任した後、明治29(1896)年には三石クレー株式会社を設立し翌年社長に就任したことが知られています。明治36(1903)年に三石耐火煉瓦株式会社の三代目社長に就任し、当時業績不振に陥っていた会社の立て直しに尽力しました。

明治32(1899)年に英保村村長を退任する際、村民から送られた顕彰の書幅(閑谷黌初代校長西穀一による撰文揮毫)が『吉永町史 通史編Ⅲ』(吉永町発行 平成8(1996)年)で紹介されています。大正9年に72歳で没すると、吉永地域の政治・経済への長きにわたる貢献を称して、永保小学校(後の吉永小学校)で村葬が執り行われました。

#### 〔参考文献〕

- ・閑谷学校研究第14号
- ・吉永町史通史編3

## 三村 久吾

みむら きゅうご

自由民権運動家・実業家



三村久吾 (吉永町史)

#### 県議会での活躍

三村久吾(天保15(1844)年〜明治41(1908)年、政治家)は、和気郡滝谷村(現吉永町)の名主三村藤久平義広の長男に生まれました。

閑谷学校に学び、幕末の維新の頃は名主を勤めました。明治5(1872)年27歳の時岡山県に出仕し、明治7年に邑久郡の第四番会議所(邑久郡神崎村ほか四一村)の副区長を務め、次いで岡山県勸業掛兼地租改正掛となり、地租改正に活躍しました。明治10(1877)年の両備作三国親睦会初会合では幹事(9人)に選ばれ、政府に国会開設の建言書の提出を決定し、明治12年に備中の忍峽稜威兄(おしおいつえ)、美作の井出毛三とともに、備前地域の代表として上京委員に選ばれ、同年末3人で海路を上京し、翌年の明治13(1880)年1月、全国に先駆けて建言書を元老院に提出しました。(明治12(1879)年、初の県会議員に和気郡から当選を果たし、明治13(1880)年5月から2期2年県会副

議長、明治15(1882)年県議再選後議長に就任、明治17年県議・議長を辞任)。この間に、岡山市の第二十二国立銀行、岡山商法会議所の開設などにも尽力しました。明治14(1881)年西穀一らと閑谷保賢会を設立、会監(幹事)として明治17(1884)年の閑谷費再興に奔走しました。

### さまざまな業界で

県議・議長を辞任した久吾は、次第に実業方面へ活動の中心を移していきました。明治19(1886)年には千坂県令を会頭として勸業諮問会がおこされ、名望ある農商工業家中から選ばれて会員49人が決まりました。岡山区から7人で、久吾もこの中に入っています。同20(1887)年5月頃、実業家である佐藤信道とともに岡山の花畑に「錦莖筵製造所」を新築しました。磯崎眠亀(註1)の工夫による花ござを「キンカンエン」と呼び、盛んに輸出されたことから、花筵製造が脚光を浴びた時期がありました。

翌年には旭日社の社長となって、劇場旭日座を経営し、貸付も行いました。旭日座は、明治10年ごろ西中島にできた岡山では最も古い劇場の一つです。明治20年に一度全燃しますが、明治21(1888)年に新たに開業されました。開場式には来賓に岡山県知事や県の高官、銀行の役員から株主、その他岡山区中の商人など600余りの人が招かれ、旭の模様入りの菓子と折詰が配られました。また、同時期に大雲寺町に高砂座(耐火煉瓦の創始者として加藤忍九郎と並んで活躍した稲垣平衛が中心となり開業)が開場し、両座とも大阪から人気役者を招いて競演、盛況を競いました。

また、生命保険会社の先駆けとして、「備作共済

千人社」を岡山七番街の三村久吾はじめ有志15人の発起で創立し、吉永で耐火煉瓦の製造を図るなど、次々と新しい事業に取り組んでいました。

明治21(1888)年1月に岡山への山陽鉄道敷設が決まると、久吾は奥吉原村(現 赤磐市奥吉原)の日笠恒太郎(註2)、日生の中司麟吉(註3)とともに、伊部焼の製法で鉄道の瓶樋を作り、山陽鉄道会社と特約を結びました。また、20年に金重利三郎がおこした伊部商會に参画するなど、その活躍は多岐に及びました。

### 大阪での事業と晩年

明治23(1890)年頃から商談のため大阪に出向くことが増え、明治30(1897)年頃には活動の場を大阪に移し、大林商店(大阪西区靱南通四丁目)の支配人になっていたという記録があります。久吾の旧宅は、現在八塔寺に移築されており、「八塔寺国際交流ヴィラ」として主に外国人のための宿泊施設に活用されています。この旧宅に残された久吾あての書簡類から、明治30年頃の久吾の動きを知ることができます。資料によると、大林商店は明治25(1892)年28歳の大林芳五郎によって創立され、土木建築事業の請負を担って発展した、今日の大林組です。久吾は明治30年頃この家に住んで、土木事業以外にも各種商品の仲介にあたりました。

その後久吾は病気のため入退院を繰り返し、入院中も手紙で商談をやり取りしていましたが、明治34(1901)年頃になると大林商店を辞め、自身で事業を行っていたと考えられます。事業内容は、マッチの製造、木材や山林の売買、炭鉱など鉱山関係、地所の売買、播但株(鉄道)、乾電池、蘭草の調達などです。明治38(1905)年末頃には三国へ帰り、

以降の書簡の宛先は和気郡三国村となっており、60歳を超えた久吾が郷里に落ち着こうとしている様子うかがえます。その後も久吾宛ての書簡には鉱山・材木・蓄電池・蘭草(イグサ)などの商取引について記載されており、そして明治41(1908)年5月26日、満63歳で世を去りました。

久吾は、吉永の一村に生まれながらも、夢をかけて政治や実業に精力的に携わりました。明治期の日本の興隆に貢献した、熱意と行動力の人でした。

### 〔註〕

- 1 磯崎眠亀：天保5(1834)年～明治41(1908)年。備中国都宇郡帯江新田村(現倉敷市茶屋町)生まれ。花筵製造業の実業家・発明家
- 2 日笠恒太郎：嘉永7(1854)年～明治28(1895)年。備前国和気郡奥吉原村(現赤磐市奥吉原)の、明治期の農業経営者、政治家、実業家。衆議院議員
- 3 中司麟吉：日生村分区委員、日生村の村長

### 〔引用元〕

- 『岡山県歴史人物事典』岡山県歴史人物事典編纂委員会 平成6年 山陽新聞社
- 『吉永町史』平成8年 角川学芸出版
- 『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢 平成8年 角川学芸出版



## 守時 喜三郎



守時喜三郎

守時喜三郎（明治15（1882）年～昭和32（1957）年）は、備前市西片上の写真家です。本名は鹿太郎で、大正6（1917）年、父喜三郎の没後に父の名を襲名しました。鹿太郎の父は元々邑久郡長船村（現瀬戸内市長船町）で薬店を営営しており、鹿太郎が7歳の頃に和気郡西片上村（現備前市西片上）へ移住後、ここでも薬店を営営しました。鹿太郎は京都にある関西美術院で洋画を学びました。在学中に日露戦争に招集され、帰郷後しばらくは家業の薬店に従事しながら、趣味として写真を撮影していたようです。

鹿太郎が本格的に写真家として活動を始めたのは大正期以降であり、大正2（1913）年に勅題写真「田家の暁」が山陽新報社第一回懸賞写真の選外佳作に選ばれたのを皮切りにして、大正15（1926）年に全関西写真連盟主催第一回写真サロンで「雨後の朝」が入選、昭和6（1917）年勅題写真「暁鶏声」が大阪朝日新聞社の大阪朝日新聞社懸賞写真に二等入選、同年三点の写真が「大阪朝日新聞社主催国際写真サロン」で入選、昭和8（1933）年には「石榴」が「写真新報」2月号の口絵に採用されるなど、芸術写真家として非凡な評価を受けました。特に「勅題写真」（天皇が新年の歌会に向けてあ

らかじめ定める歌の主題を、写真のテーマにしたもの。一等作品は元旦の新聞の一面を飾りました。）については、大正2（1913）年に山陽新報社の顕彰に応募した「田家の暁」以降、度々投稿と入賞を重ね、昭和5（1930）年発表の勅題写真「海辺巖」は大多府島を写したものであり、この写真は山陽新報社の一等入選を獲得しました。

また、彼は商業写真家として、依頼を受けて各地の風景・人物・行事・文化財等を撮影しています。これらの写真は『岡山県通史』（永山卯三郎著 昭和5（1930）年発行）、『片上町史』（桂又三郎・横山章編著 昭和26（1951）年発行）などに収録され、その中には現在失われて見ることが出来ないものもあります。

写真家・守時喜三郎が撮影した大正・昭和初期の写真は、今もなお当時の風景や人々の生活を知るための貴重な資料として大切に受け継がれています。

## 山田 方谷

藩政改革を断行した陽明学者・教育者



山田方谷  
（出典：近代日本人の肖像）

### 山田方谷の生まれと学び

山田方谷（文化2（1805）年～明治10（1877）年）は、江戸時代末期から明治時代初期の漢学者・備前松山藩士です。阿賀郡西方村（現高梁市中井町西方）の農商の家に生まれ、父・五郎吉

は農業のかたわら精油業とその販売を生業として家計を支えていました。山田家は方谷の曾祖父の代に所払い（註1）となっており、それ以来山田家の再興が祈願でした。五郎吉は方谷を厳格に育て、方谷が幼少期から聡明であったため、5歳の時から新見藩儒丸川松隠（註2）の塾へ入門させました。方谷が14歳の時に母親、続いて翌年に父親を亡くしたため、方谷は松隠の塾を離れ、家業と学問に専念します。文政8（1825）年21歳の時、松山藩主板倉勝職から2人扶持を与えられ、藩校有終館への出席が許されました。文政10（1827）年23歳の時に京都へ遊学し、丸川松隠の知己である寺島白鹿のもとで朱子学を学び、三度目に訪れた時に陽明学に出会います。その後備前松山に戻り、苗字帯刀を許され、有終館会頭を任ぜられました。天保5（1834）年、江戸に出府し、佐藤一斎（註3）の門下となり、朱子学から陽明学に転じつつあった方谷の学問が確立されます。陽明学者である熊沢蕃山に傾倒し、大きな影響を受けました。天保7（1836）年、帰藩後は有終館学頭となり、嘉永2（1849）年板倉勝静が藩主になると元役兼吟味役に抜擢されて藩政改革を担うこととなりました。

### 方谷と備前松山藩主板倉勝静

方谷は、備前松山藩の藩政改革として、人材登用をはかり、財政の立て直し、軍制の強化につとめ、10万両の負債を償却して10万両の余財をみるほど、危機的状況だった財政を回復させました。この藩政改革の成功は他藩にまで知れ渡るところとなり、長州藩の久坂玄瑞（註4）をはじめ諸藩から視察に来る者が多くいました。藩主の板倉勝静は奏者番（註5）の役職に加え安政4（1857）年から寺社奉行

〔註6〕を兼務し、さらに文久2(1862)年には老中に就任しました。その間方谷は江戸に呼ばれて顧問として仕え、幕府の動乱期の政治にも携わりました。慶応3(1867)年、大政奉還がなされ、翌年から戊辰戦争が勃発しました。その際、藩主が旧幕府の老中である備前松山藩は朝敵とみなされ、新政府の命を受けた岡山藩の占領下に入りました。

### 山田方谷と閑谷学校

方谷は、慶応3(1867)年、自身の体調への不安により、主君である勝静のいる京都を離れ、備前松山へと戻りました。明治以降、方谷は教育に専念することとなります。明治2(1869)年、方谷は長瀬(現 高梁市中井町)の自宅を増築し、長瀬塾を開きました。翌年10月には母の出身地である(現 新見市大佐)に居を移し、小阪部塾を開きました。長瀬塾には、現在の岡山県域の備前・備中・美作だけでなく、近畿・東海・北陸・九州からも門人が集まりました。小阪部塾には、関東からも訪れるなど、全国から多くの門人が学び、彼らが地元へ戻って明治期の政治経済・文化に手腕を振るうこととなります。

当時の岡山の学校事情で語るべきは、閑谷学校に

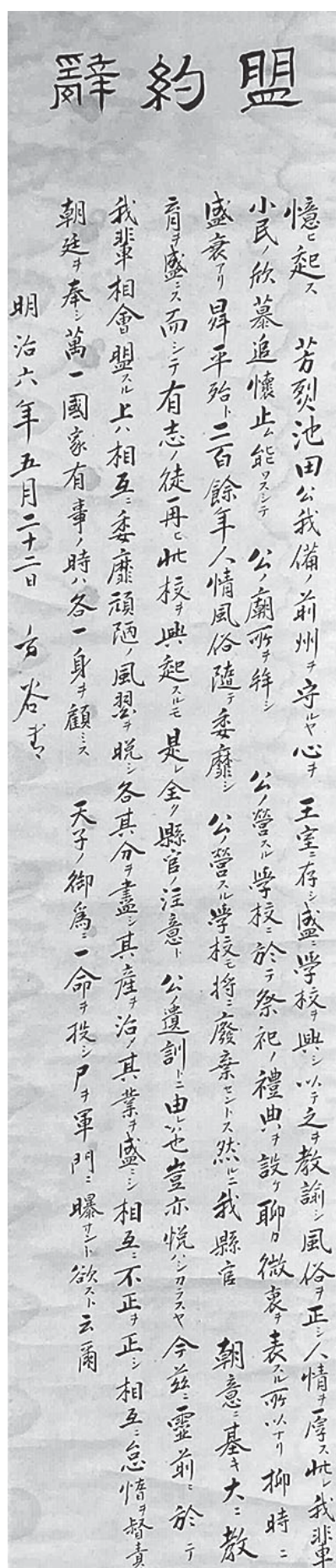
ついてです。明治3(1870)年、岡山藩政の一新により、閑谷学校が閉鎖され、翌年7月の廃藩置県によって岡山藩は岡山県になり、学校督事(校長)に西穀一(天保14(1843)年)明治37(1904)年)が就任しました。閑谷学校は、閉鎖してから学校の敷地と建築物が政府の管轄となっていました。廃藩置県により藩校に改革がなされ、西穀一校長のもと、従来の漢学ではなく、普通学校として英語科・仏語科を置き、慶應義塾その他から英・仏語の教師を招聘して洋学を始めることとなりました。当時の旧岡山藩土坪田繁・岡本巍・谷川達海らはこれに反発し、漢学廃止の取りやめを主張し、山田方谷を閑谷塾に招聘して従来の閑谷学校の教育を存続する方針としました。明治5(1872)年、岡本巍、中川横太郎、谷川達海らが閑谷学校の再興の計画を立て、元岡山藩主池田慶政からも多額の寄付を受け、方谷に來校の依頼をしました。方谷は閑谷学校の再興を承諾し、小阪部塾を運営しながらも、毎年春と秋の2回各1〜2か月閑谷に滞在して教育にあたりました。

明治6(1873)年、山田方谷を迎えて閑谷学校は再開され、「閑谷精舎」と号しました。方谷は閑谷に来て、まず学業方針を示しました。閑谷では陽

明学を主とし、朱子学を従としました。200年近く、朱文公学規を講堂に掲げてきた閑谷学校において、初めて陽明学が取り上げられたのです。方谷は、閑谷学校と、熊沢蕃山(陽明学の祖とされた儒家・中江藤樹の弟子)を結び付けて、蕃山を陽明学者として思慕したためであろうと、『閑谷学校史』にあります。方谷は蕃山と同様に、儒学を社会のために役立つ学問とする実用経世の学を尊いものとし、教育の目的は「治国平天下」にあつたと考えられます。方谷は明治9(1876)年まで閑谷精舎へ赴き後世の指導にあたり、明治10(1877)年6月26日に小阪部にて、73歳で逝去しました。

### 〔註〕

- 1 所払い：江戸時代の刑罰の一つ。その居住地からの追放で、追放刑の中では最も軽く、闕所(没収刑)が付加されることはありません。宗門人別改帳に記載せず、本来住むべき土地ではない地に住んだり、離縁状を出さずに再婚した者が対象
- 2 丸川松陰：浅口郡西阿知村(現・倉敷市)出身で新見藩に仕えた儒学者
- 3 佐藤一斎：安永元(1772)年〜安政6



山田方谷「盟約辞」  
(加子浦歴史文化館所蔵)



(1859)年、江戸時代の儒者。昌平坂学問所の教授。朱子学の大家ですが陽明学にも精通し、門人に渡辺崋山、佐久間象山、横井小楠など幕末に活躍した人物も多くいます。

4 久坂玄瑞：天保11(1840)年～元治元(1864)年、幕末期の長州藩士。松下村塾に学び、高杉晋作とともに双壁とたたわれています。文久2(1862)年藩論を尊王攘夷へと導き、江戸御殿山のイギリス公使館焼打ち事件(東禅寺事件)に参加。元治元(1864)年、禁門の変で自殺しました。

5 奏者番：江戸時代の職名。老中の支配。譜代大名のなかから選ばれ、老中などへの昇進コースの出発点となりました。

6 寺社奉行：江戸時代の三奉行(勘定奉行・町奉行・寺社奉行)の一つで、最も権威が高い機関。全国の寺社および僧侶・神職や寺社領農民・門前町町人、修験者、陰陽師、虚無僧などの民間宗教者、碁将棋師、連歌師などの芸能者をも管掌しました。

#### 〔引用元〕

『関谷学校史』

『岡山県歴史人物事典』

岡山県歴史人物事典編纂委員会

平成6年、山陽新聞社

『岡山県立博物館 平成26年度特別展 山田方谷展』

平成26年 岡山県立博物館

『新版 日本史辞典』朝尾直弘、宇野俊一、田中琢

平成8年、角川学芸出版

## 山本 陶秀 (本名 山本 政雄)

(明治39(1906)年～平成6(1994)年)



山本陶秀

70年間焼き物一筋の人生を歩み、ろくろの名手といわれています。15歳のときから窯元修業に入り、27歳で独立したあと、京都の楠部彌式の門をたたきました。

昭和18(1943)年、軍需省の管轄だった国立京都窯業試験場が軍の依頼で、備前焼火櫓を応用した食器を生産することになり、その制作者に選ばれました。彼は軍需省の嘱託として1年間、皿や甕などの火櫓食器を焼きました。また、備前焼で手榴弾も作りしましたが、実戦には使われませんでした。昭和44(1969)年には伊部をご訪問の三笠宮さまに、地元公民館で茶器・鉢など制作のろくろ技術を披露しました。

陶秀は昭和39(1964)年から44(1969)年にかけて、次々とヨーロッパ5カ国(オランダ・フランス・イタリア・西ドイツ・イギリス)、韓国と東南アジア4カ国(台湾・香港・マレーシア・シンガポール)およびアメリカを歴訪しました。窯元、窯跡、史跡、美術館を視察して海外の文化に接し、芸域を広めました。

陶秀の作品について、陶陽の千利休、啓の古田織部に対し、小堀遠州にたとえる人がいます。遠州は

江戸時代の作庭家であると同時に有名な大名茶人でもありました。陶秀の作品のきめが細かくてソツがなく上手ものの感のするところが、女性的といわれる遠州に似ているというのでしょうか。

茶陶に長じ、茶入、花生にすぐれた作品が多くあります。陶秀は自然体を強調し、無理をせず、自然に逆らわないことを作陶の基本としました。

昭和51(1976)年 紫綬褒章受章

昭和62(1987)年 国指定重要無形文化財「備前焼」保持者(人間国宝)に認定

平成3(1991)年 備前市名誉市民

平成6(1994)年 没、勲四等旭日小綬章受賞

#### 〔引用元〕

『わがまちの文化遺産』平成10年 備前市文化協会

『備前焼の伝統と歴史』備前焼陶友会